喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

県営畑地帯総合土地改良事業（塩道・湾頭原地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

提（さが）り遺跡
後田（うしろだ）遺跡
水口（みずぐち）遺跡
竿（さお）ク遺跡

1996年3月

鹿児島県大島郡喜界町教育委員会

グスク土器・甕（提り遺跡　11トレンチ　35）

獣骨・グスク土器出土状況（提り遺跡11トレンチ　Ｐ２）

序　　文

わが喜界島は，新世代第３紀の島尻層を基盤に，琉球石灰岩，志戸桶層隆起珊瑚礁及び砂丘等の層から形成された島です。

本町における最初の埋蔵文化財調査は昭和32年に九学会によって行われ，荒木農道遺跡，厳島神社貝塚などが発見されました。遺物は縄文時代後期の土器片，石斧，貝器，骨角器等が出土しています。

その後も昭和61年度に先山遺跡とハンタ遺跡，昭和63年度に島中Ｂ遺跡，平成２年度に青り花遺跡，平成３年度に穴川・受水遺跡，平成４年度にオン畑・巻畑Ｂ・巻畑Ｃ・池ノ底遺跡，平成５年度にウ川田・前ヤ・上田遺跡の発掘調査が行われています。

今回は，県営畑地帯総合土地改良事業（塩道・湾頭原地区）に伴い，「提り・後田・水口・竿ク遺跡発掘調査事業」として県教育庁文化課及び県立埋蔵文化財センターの指導・援助を得て，平成６年９月から10月にかけて発掘調査を実施することができました。

本書はその報告書であります。今後この資料が地域の歴史研究，学校教育及び社会教育の場で活用され，埋蔵文化財への関心が高まり，広く文化財保護への理解が深まっていくことを期待します。

発行にあたり，県立埋蔵文化財センターの先生方をはじめ，土地所有者や発掘作業員の方々など，この調査に際して多くのご理解とご協力をいただいた関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成８年３月

喜界町教育委員会
教育長　**平　　義　哉**

報告書抄録

ふりがな	さがりいせき　うしろだいせき　みずぐちいせき　さおくいせき
書名	提り遺跡・後田遺跡・水口遺跡・竿ク遺跡
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業（塩道・湾頭原地区）に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	(6)
編著者名	倉元　良文・今村　敏照
編集機関	喜界町教育委員会
所在地	鹿児島県大島郡喜界町湾61番地
発行年月日	１９９６年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東径 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
提り遺跡（さがいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 大島郡（おおしまぐん） 喜界町（きかいちょう） 塩道提り（しおみちさが）	465291	90－55	28° 20′ 33″	130° 0′ 12″	19940905 ～ 19940914 19941003 ～ 19941007	145	県営畑地帯総合土地改良事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
提り	集落	古代末～ 中世初頭	柱穴	須恵器・類須恵器 白磁（玉縁口縁碗） 青磁・グスク土器 滑石製石鍋 磨石・敲石・石皿 獣骨	
後田 水口 竿ク					遺構・遺物なし

提り遺跡
竿ク遺跡
水口遺跡
後田遺跡
喜界島
喜界空港
1:50,000
1000m 0 1000 2000 3000
奄美大島
喜界島
徳之島
沖永良部島
与論島
沖縄本島
屋久島
種子島
トカラ列島

付図　提り遺跡等の位置

例　　言

1　本報告書は，県営畑地帯総合土地改良事業（塩道・湾頭原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は喜界町教育委員会が主体となり，鹿児島県教育庁文化課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

3　出土遺物中の獣骨については，鹿児島大学農学部教授西中川駿氏の指導・協力を得た。

4　本書で用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。

5　遺物番号は通し番号であり，本文及び挿図・図版の番号は一致する。

6　本文中遺構の表記について，以下の記号を用いた。

柱穴，ピット → P

7　現場における実測・写真撮影は倉元良文，鶴田静彦，今村敏照が行い，遺物の実測・実測図のトレース・写真撮影は倉元，今村が行った。

8　本書の執筆担当は以下のとおりである。

第Ⅰ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章	今　村
第Ⅱ章	倉　元
第Ⅵ章	西中川

9　本書の編集は倉元，今村が行った。

10　本遺跡の出土遺物は喜界町教育委員会で保管し，展示・活用するものである。

目　　次

◇ 序　　文
◇ 報 告 書 抄 録
◇ 例　　言
第Ⅰ章 調 査 の 経 過 …… 1
第1節 調査に至るまでの経過 …… 1
第2節 調 査 の 組 織 …… 1
第3節 調 査 の 経 過 …… 2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 …… 4
第Ⅲ章 層　　序 …… 8
第Ⅳ章 発 掘 調 査 …… 10
第1節 調 査 の 概 要 …… 10
第2節 提 り 遺 跡 …… 10
第3節 後 田 遺 跡 …… 33
第4節 水 口 遺 跡 …… 33
第5節 竿 ク 遺 跡 …… 34
第Ⅴ章 ま と め …… 36
第Ⅵ章 提り遺跡出土のウシの遺体 …… 39

挿 図 目 次

付 図 提り遺跡等の位置
第1図 周 辺 の 遺 跡 …… 5
第2図 土 層 柱 状 図 …… 8
第3図 塩道地区（提り・後田・水口遺跡）調査対象範囲とトレンチ配置図 …… 9
第4図 提り遺跡施工前の区画とトレンチ配置図 …… 11
第5図 提り遺跡1トレンチ土層断面図・遺構配置図 …… 12
第6図 提り遺跡1トレンチ出土遺物(1) …… 13
第7図 提り遺跡1トレンチ出土遺物(2) …… 14
第8図 提り遺跡2トレンチ土層断面図・遺構配置図 …… 15
第9図 提り遺跡2トレンチ出土遺物(1) …… 16
第10図 提り遺跡2トレンチ出土遺物(2) …… 17
第11図 提り遺跡3トレンチ土層断面図・遺構配置図・表層出土遺物 …… 17
第12図 提り遺跡4トレンチ土層断面図・遺構配置図 …… 18
第13図 提り遺跡5，6トレンチ土層断面図・遺構配置図 …… 19
第14図 提り遺跡6トレンチ出土遺物(1) …… 20
第15図 提り遺跡6トレンチ出土遺物(2) …… 21

第16図　提り遺跡８トレンチ土層断面図・遺構配置図 …… 21
第17図　提り遺跡10トレンチ土層断面図・遺構配置図・出土遺物 …… 22
第18図　提り遺跡11トレンチ土層断面図・遺構配置図・遺物出土状況 …… 23
第19図　提り遺跡11トレンチＰ２遺物出土状況 …… 24
第20図　提り遺跡11トレンチＰ２内出土遺物(1) …… 24
第21図　提り遺跡11トレンチＰ２内出土遺物(2) …… 25
第22図　提り遺跡11トレンチＰ３遺物出土状況 …… 26
第23図　提り遺跡11トレンチＰ３内出土遺物(1) …… 26
第24図　提り遺跡11トレンチＰ３内出土遺物(2) …… 27
第25図　提り遺跡11トレンチ包含層（Ⅱ層）出土遺物(1) …… 28
第26図　提り遺跡11トレンチ包含層（Ⅱ層）出土遺物(2) …… 29
第27図　提り遺跡施工後の区画と遺跡の範囲 …… 32
第28図　後田遺跡・水口遺跡トレンチ土層断面図 …… 33
第29図　竿ク遺跡トレンチ土層断面図 …… 34
第30図　竿ク遺跡トレンチ配置図 …… 35

表　目　次

第１表　周辺遺跡地名表(1) …… 6
第２表　周辺遺跡地名表(2) …… 7
第３表　提り遺跡出土遺物観察表(1) …… 30
第４表　提り遺跡出土遺物観察表(2) …… 31
第５表　提り遺跡出土石器計測表 …… 31

図　版　目　次

図版１ …… 40
図版２ …… 41
図版３ …… 42
図版４ …… 43
図版５ …… 44
図版６ …… 45
図版７ …… 46
図版８ …… 47
図版９ …… 48
図版10 …… 49

第Ⅰ章　調 査 の 経 過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県農政部農地整備課（喜界土地改良出張所・以下県農政部）は大島郡喜界町塩道及び湾頭原地区において，県営畑地帯総合土地改良事業を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島教育委員会文化課（以下文化課）に照会した。

これを受けて，鹿児島県立埋蔵文化センター（以下県埋文センター）と喜界町教育委員会社会教育課（以下町社会教育課）が平成５年度に埋蔵文化財分布調査を実施したところ，事業予定区内に４ヵ所の遺物散布地が確認された。

この分布調査の結果をもとに，県農政部・文化課・町社会教育課は埋蔵文化財の保護と事業の推進の調整を図るための協議を行った結果，事業着手前に埋蔵文化財確認調査（以下確認調査）を実施することになった。

確認調査は喜界町教育委員会が調査主体者となり，発掘調査は県埋文センターに依頼した。

第２節　調 査 の 組 織

発掘調査主体者	喜界町教育委員会			
発掘調査責任者	喜界町教育委員会	教育	長	平　義哉
発掘調査事務担当	喜界町教育委員会	社会教育課	課長	榊　忠洋
〃	〃	〃	課長補佐	児玉右三
〃	〃	〃	派遣社教主事	副　宏人
発掘調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		文化財主事	倉元良人
〃	〃		文化財主事	鶴田静彦
〃	〃		文化財研究員	今村敏照

発掘作業員

大喜　悦次，小田トミ子，開　フミ子，上山　満則，上山はつみ，樹本　政，樹本トスエ
香島スエノ，桜井　クニ，篠原繁四郎，篠原　タケ，竹下直次郎，富崎セイ子，西　孝江
増田　芳江，宮内トシ子，都　忍，安田　繁元，吉崎ツネ子，吉原　絹代，萬　典子

整理作業員

伊集院香代子，伊口　亮子，池田　成子，今村むつみ，岩崎　律子，川田美津子，木田　安枝
郷司山いつ子，後堂　悦子，小山　君子，四丸久美子，竹下　淳子，竹添つるえ，徳永　郁代
徳永美喜子，鳥巣のり子，中名主和子，西　清子，野入満喜子，野口　久子，早川　孝子
東　志津子，平山　順子，福田　智子，福元　俊子，福屋　民江，細田　律子，本多　直子
前田　秀子，前田まさこ，前之園俊子，松元　雅子，森　静江，安永　一葉，行船　順子

第3節　調 査 の 経 過

発掘調査は，平成６年９月５日から９月14日及び10月３日から10月７日までの内12日間実施し，その後県立埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成作業を行った。以下調査の経過概要を，調査日誌より抄述する。

９日５日（月）　〔竿ク遺跡〕

機材搬入・テント設営の後，作業員に発掘事前説明を行う。１～３トレンチを設定。重機により表土を削除し，掘り下げを開始。

６日（火）　〔竿ク遺跡〕

１～３トレンチからは遺構・遺物ともに発見されず。写真撮影，土層断面図作成。埋め戻し。

〔提り遺跡〕

機材搬入，テント設営，プレハブ設置。１～５トレンチを設定。重機により表土を削除し，掘り下げを開始。

〔後田遺跡〕

１トレンチを設定。重機により表土を削除。

〔水口遺跡〕

１・２トレンチを設定。重機により表土を削除。

７日（水）　〔提り遺跡〕

１～５トレンチの掘り下げ。すべてのトレンチのⅢ層上面でピット状遺構を検出。１トレンチのピットから須恵器出土。写真撮影。

〔水口遺跡〕

１・２トレンチの掘り下げ。２トレンチの掘り下げ完了。遺構・遺物なし。写真撮影。

８日（木）　〔提り遺跡〕

３トレンチの遺構平面図作成。２・４トレンチのピット掘り下げ。

〔水口遺跡〕

１トレンチの掘り下げ完了。遺構・遺物なし。写真撮影。

９日（金）　〔提り遺跡〕

１トレンチを拡張し，ピットを掘り下げ。４トレンチの遺構平面図作成。６～12トレンチを設定し，重機により表土を削除。６・８トレンチの掘り下げ。ともにⅢ層上面でピット状遺構を検出。６トレンチのピットから須恵器出土。写真撮影。

〔後田遺跡〕

１トレンチの掘り下げ完了。遺構・遺物なし。写真撮影。

13日（火）　〔提り遺跡〕

３～６・８トレンチの遺構平面図・土層断面図作成。写真撮影。７・11トレンチの掘り下げ。11トレンチのⅢ層上面でピット状遺構検出。磨石・須恵

器・類須恵器出土。6・8トレンチ埋め戻し。

14日（水）　〔提り遺跡〕

7トレンチの土層断面図作成。写真撮影。3・4・6・7トレンチ埋め戻し。12トレンチの掘り下げ完了。遺構・遺物なし。作業が2週間中断するため，各トレンチにシートをかける。

〔後田遺跡〕

1トレンチの土層断面図作成。写真撮影。

〔水口遺跡〕

1・2トレンチの土層断面図作成。写真撮影。

10月3日（月）　〔提り遺跡〕

9・10トレンチの掘り下げ。10トレンチのⅢ層上面でピット状遺構検出。11トレンチのⅡ層掘り下げ。Ⅲ層上面でピット状遺構検出。

〔後田遺跡〕

1トレンチ埋め戻し。調査終了。

〔水口遺跡〕

1・2トレンチ埋め戻し。調査終了。

4日（火）　〔提り遺跡〕

1・2・10・11トレンチのピット掘り下げ。11トレンチのピット内より獣骨と土器出土。写真撮影。9・12トレンチの土層断面図作成。写真撮影。

5日（水）　〔提り遺跡〕

1・11トレンチのピット掘り下げ。2・10トレンチの遺構平面図・土層断面図作成。写真撮影。

6日（木）　〔提り遺跡〕

1・11トレンチの遺構平断面・土層断面図作成。写真撮影。2・10トレンチ埋め戻し。

7日（金）　〔提り遺跡〕

1・11トレンチ埋め戻し。調査終了。機材・テント・プレハブ撤収。本日をもって調査日程のすべてを完了。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

喜界島は鹿児島本土から約375km，奄美大島から約42kmの北緯28度19分，東経130度に位置する洋上に浮かぶ島である。１島で１町をなし，南東に長く14km，北東部から南西部にかけてしだいに幅を広げ，その周囲48.6km，面積約56km²である。

概して平坦な隆起珊瑚礁の島で，最も高い所は島の中央東側にある百之台で標高は224ｍを測る。この百之台を中心に北西側へは緩やかに傾斜し，広い段丘地形が見られる。これに対して南東部は急崖となり，海岸線にそってわずかな平坦地が見られるだけである。こうした地形のために，河川の発達は乏しく，用水のほとんどは地下水や湧水に依存している。

気候は亜熱帯性気候で年平均気温23℃と，年間を通じて温暖である。年間の降水量は3,000mmに達し，全島がガジュマル等の常緑樹に覆われている。

本島の基盤をなしているのは，新生代第三期鮮新世の島尻層で，琉球石灰岩，志戸桶層，隆起珊瑚礁，砂丘が上層を形成している。マージと呼ばれる暗赤褐色土壌が島の大部分を覆っている。

喜界島も他の大島群島の例にもれず，13世紀からは琉球王朝，17世紀からは薩摩藩の支配下に置かれた。特に，薩摩藩の圧政には島民はおおいに苦しめられた。これ以前の時代については源氏や平家にまつわる言い伝えや地名が残っている。大字湾坊主前には僧俊寛の墓と伝えられるものがある。また志戸桶の「七城」や早町の「平家森」は，平家の落人の残したものであると伝えられている。小野津の「雁股の泉」については，源為朝にまつわる伝説も残っている。

喜界島における考古学的研究は，戦前は三宅宗悦による湾貝塚・手久津久貝塚の報告がある。戦後においては，昭和30年代の九学会連奄美大島共同調査委員会考古学班による分布調査が行われ，荒木農道遺跡，荒木小学校遺跡，湾天神貝塚，伊実久厳島神社貝塚，七戸桶遺跡などが紹介されている。

昭和61年には熊本大学によるハンタ遺跡の発掘調査が行われている。調査の結果，宇宿上層式期の住居址群やかまど状遺構等11基の遺構が確認された。遺物は，面縄西洞式，喜式Ⅰ式，宇宿上層式等の土器，石斧，敲石，クガニイシ等の石器が出土している。同じく昭和61年には喜界町教育委員会による先山遺跡の発掘調査が実施され，兼久式土器や貝斧などが報告されている。昭和63年には島中Ｂ遺跡の発掘調査が行われ，青磁や白磁，類須恵器等が出土している。平成５年には，オン畑遺跡，巻畑Ｂ遺跡，巻畑Ｃ遺跡の調査が行われ，土師器，須恵器，類須恵器，鉄滓等の出土が報告されている。平成６年にはウ川田遺跡の調査が行われ，青磁・白磁等が出土している。

今回の調査対象となった竿ク遺跡は，喜界町役場から南東に約１kmの緩やかに上る傾斜地で，標高約35ｍの畑に立地する。提り遺跡・後田遺跡・水口遺跡は島の北東部で早町港を南に望み，県道喜界島循環線に沿って標高約50ｍ前後の台地上に所在する。現況はいずれも畑である。

〔参考文献〕

喜界町教育委員会　『喜界島みてある記』 1982

『日本地名辞典』 角川書店　1983

喜界町教育委員会　「先山遺跡」『喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 1987

喜界町教育委員会　「島中Ｂ遺跡」『喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』 1989

喜界町教育委員会　「島中Ｂ遺跡Ⅱ」『喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』 1989

喜界島
喜界町
喜界空港
赤連
湾
中里
荒木
手久津久
上嘉鉄
花良治
百之台
阿伝
伊実久
長嶺
早町
白水
塩道
佐手久
小野津
池台
中間
大朝戸
西目
城久
山田
川嶺
湾原
嘉鈍
嘉仙
1:50,000
1000m 0 1000 2000 3000

第1図　周辺の遺跡

第1表　周辺遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
－1	伊実久貝塚	伊実久伊林1,630	台地	縄文晩期	宇宿上層式土器・石器・獣骨	「奄美自然と文化」1959.3発行
－2	荒木貝塚	荒木喜入山	平地	〃	宇宿上層式土器・人骨	〃
－3	湾天神	湾中間3の2	台地	〃	石斧・土器・骨片・貝類	〃
－4	七城	志戸桶増ケダ189	平地		七城付近より土器・石器	〃
－5	先山	先山字蒲原	台地	古墳～平安	兼久式	
－6	荒木小学校	荒木	砂丘	弥生	宇宿上層式・石斧	
－7	赤連	湾字赤連		縄文	赤連式	
－8	ハンタ	西目字半田	台地	縄文	住居跡	昭和61年熊大発掘
－9	志戸桶	志戸桶字七城	台地		類須恵器完形5・石鍋	
－10	志戸桶貝塚	志戸桶				
－11	平家盛	早町字上ヶ田3番	山頂			
－12	八幡神社境内	小野津	砂丘上	歴史～近世	須恵器双耳骨小壺・白磁壺・石器	境内内の祠に収められている
－13	下田の滝周辺	伊実久	砂丘上	古墳～歴史	類須恵器	
－14	大城久	伊砂	段丘上	古墳～歴史	類須恵器・青磁・フイゴ羽口・鉄滓	ウフグスク
－15	伊砂一帯	伊砂	砂丘上	弥生～	石器・フイゴ羽口	
－16	アギ小森田	坂嶺字アギ小森田	砂丘上	縄文～	土器（面縄東洞式・嘉徳式）・類須恵器	
－17	前田	坂嶺字前田	丘陵上	縄文～歴史	土器（宇宿上層式）・類須恵器・青磁・陶器	
－18	上砂	坂嶺上砂	段丘上	歴史～	類須恵器	
－19	川堀	中能字川堀	段丘上	縄文～歴史	土器（宇宿上層式）・類須恵器・青磁・陶器	
－20	柏毛	西目字柏毛	段丘上	古墳～歴史	類須恵器・青磁・白磁・陶器	
－21	上戸間	西目字上戸間	段丘上	歴史～	類須恵器	
－22	知無田・能田	大朝戸知無田・能間	段丘上	歴史～	類須恵器・青磁・石器・フイゴの羽口	
－23	中熊	中熊	台地	歴史～近世	陶磁器・石器	
－24	先内	先内	段丘上	古墳～	土器・陶磁器・石器	
－25	島中	島中	段丘上	古墳～	類須恵器・青磁・石器・フイゴの羽口	
－26	浜川邸	湾字赤連			石器	
－27	総合グラウンド	湾久大真	砂丘上	縄文～	土器（嘉徳式）・土製品・貝殻	中央公民館所蔵
－28	中里貝塚	中里	砂丘上	古墳～	土器（兼久式）・石器・貝殻	
－29	荒木農道	荒木	砂丘上	縄文～	人骨・宇宿下層式貝輪・玉類	九学会調査団調査・埋葬址
－30	手久津久貝塚	手久津久	砂丘上	縄文～	石器・土器	包含層露出
－31	上嘉鉄	上嘉鉄大供	砂丘上	縄文～	土器（喜念Ⅰ式・宇宿上層式）・類須恵器他	上嘉鉄小学校所蔵
－32	長嶺	長嶺	段丘上	歴史	類須恵器・滑石製石鍋	
－33	早町中学校	早町	砂丘上		石器（石斧・叩き石）	早町小学校所蔵・標高10m湧水

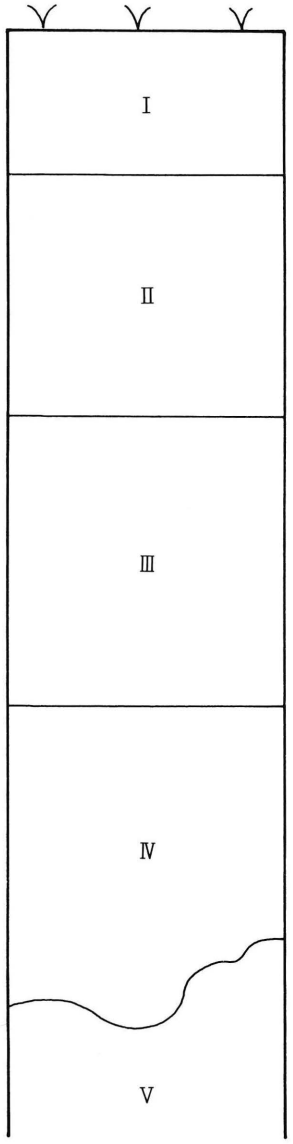
第2表　周辺遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
−34	川嶺グスク	川嶺	丘陵	歴史		
−35	坂元	志戸桶字坂元		歴史～	類須恵器・青磁・滑石製石鍋・染め付	
−36	当地	志戸桶字当地	丘陵	歴史～	類須恵器・滑石製石鍋・玉類	竹下軍陸氏所蔵
−37	振川	志戸桶字振川	砂丘上		土器・貝刃・貝殻	
−38	島中B	島中	台地	歴史～	類須恵器・白磁	昭和63年度発掘調査
−39	滝川	滝川	台地上	歴史～	類須恵器・白磁	
−40	坂嶺川窪	坂嶺字川窪	砂丘上	歴史～	類須恵器	
−41	荒木海岸	荒木	砂丘上	古墳～	土器（兼久式？）・貝殻	
−42	ヤスガマ	喜界町ヤスガマ		城		
−43	坂元	坂元		城		
−44	竿ク	湾頭原竿ク		城		本報告書
−45	君竹	湾頭原君竹		城		
−46	池ノ底B	小野津池ノ底				
−47	巻畑C	小野津巻畑		城		
−48	オン畑	小野津オン畑		城		
−49	受水，嘉鉄川					
−50	穴川					
−51	尾川	湾	台地	弥生～古墳		
−52	馬クビリ	湾	台地	中世		
−53	水口	塩道	段丘上	中世		本報告書
−54	後田	塩道	段丘上	中世		本報告書
−55	提り	塩道	段丘上	縄文～中世		本報告書
−56	中寺	島中	段丘上	縄文～中世		
−57	前田マシ	島中	段丘上	縄文～中世		
−58	前ヤ	島中	緩斜面	古墳～中世		
−59	作屋下	島中	緩斜面	中世		
−60	ウ川田	島中	緩斜面	縄文～中世		
−61	芋田於さ	島中	緩斜面	中世		
−62	上田	島中	緩斜面	縄文～中世		
−63	向田	島中	緩斜面	中世		
−64	前田A	島中	段丘上	中世		
−65	前田B	島中	段丘上	中世		
−66	才川	島中	段丘上	中世		
−67	ヨン半田ノ上	島中	段丘上	古墳～中世		
−68	マシヤダ	島中	段丘上	縄文		

第Ⅲ章　層　　序

今回の調査区は標高30～50ｍの畑地に位置しており，いずれも天地返しと呼ばれる土の入替えを受けている。そのため提り遺跡の一部を除き，ほとんどが遺物包含層まで削平されていた。

前章においても触れたように，本島における地質概要は，基盤層上に珊瑚礁や砂層が形成され，暗赤褐色粘質土が薄く覆うというものである。塩道地区と湾頭原地区は直線距離で約７km離れているため若干の差異はみられるものの，基本的層序は概ね以下のとおりである。



Ⅰ層　表土（耕作土）。褐色もしくは茶褐色を帯び，厚さは20～40cmである。場所によって微細な珊瑚粒を含む。

Ⅱ層　黒褐色の硬質粘土で，乾燥するとクラックが発達する。遺跡内では大部分が削平されており，一部のトレンチと遺構内においてのみ確認された。須恵器，類須恵器，白磁，滑石製石鍋等の遺物包含層である。

Ⅲ層　暗赤褐色もしくは明茶褐色を呈する硬質粘土で，Ⅱ層同様乾燥するとクラックが発達する。島全域でみられ，一般にマージと呼称されている。

Ⅳ層　基盤上に形成された砂丘に起因する乳白色砂質土である。今回の調査では，湾頭原地区（竿ク遺跡）においてのみ確認された。

Ⅴ層　基盤上に発達した起伏に富む隆起珊瑚礁である。今回の調査では，塩道地区（提リ・後田・水口遺跡）においてのみ確認された。

第2図　土 層 柱 状 図

第３図　塩道地区（提り・後田・水口遺跡）調査対象範囲とトレンチ配置図

第Ⅳ章　発　掘　調　査

第1節　調　査　の　概　要

今回の調査区域は，島の南東と北西の２地域に大きく分かれていた。そのため，発掘調査は当初南東部の竿ク遺跡（湾頭原地区）から取りかかり，終了後北西部の塩道地区に移動するとともに，提リ・後田・水口の３遺跡について平行して調査を実施した。

調査対象区はすべてサトウキビ畑もしくは牧草地であり，重機による表土削除の後，人力によって掘り下げを行った。各トレンチは２×５ｍを基準とし，地形や遺構・遺物の広がり等状況に応じ適宜拡張・縮小して設定した。

第2節　提　り　遺　跡

塩道提りに所在する。調査対象区域の標高は51～54ｍで，周辺の地面から平均約２ｍせり上がった微高地上に広がる。遺跡自体は，島を構成している海岸段丘の縁付近にあり，海岸線からの直線距離は約700ｍである。また，南西250ｍには平家落人の見張り台との言い伝えがある「平家森」が存在する。

調査対象面積11,000㎡に対し12本のトレンチを設定し（２×５ｍを基準），検出遺構や出土遺物の状態に応じて適宜拡張を行った。調査面積は145㎡である。

１トレンチ

調査区南東寄りの畑地東隅，標高約51ｍに設定した。当初２×５ｍで設定したが，表土剝ぎの段階で多数のピット状遺構（柱穴）を検出したため拡張し，最終的に約21㎡（３×７ｍ）について調査を行った。表土の厚さは20～40㎝で，表土以下はⅢ層の暗赤褐色粘質土が検出された。Ⅱ層は耕作による削平で残存せず，遺構内においてのみ確認された。

1.　遺　構

柱　穴（第５図）

Ⅲ層上面で，計34基検出した。埋土はⅡ層の黒褐色土である。平面プランは径18～42㎝の円形もしくは楕円形で，検出面からの深さは約10～50㎝である。建物跡は明確にできなかったが，Ｐ３，22，23，27の底から根石と思われるサンゴ礫が出土している。Ｐ25・Ｐ26は他のピットと比較して深く掘り込まれ（約50㎝），検出面から約30㎝の深さまで大小の礫が埋め込まれていた。Ｐ25内からは砥石及び炭化物片が出土した。またＰ１，３，18，33内からも須恵器・類須恵器・白磁・磨石等の遺物が出土している。

2.　遺　物（第６・７図　１～20）

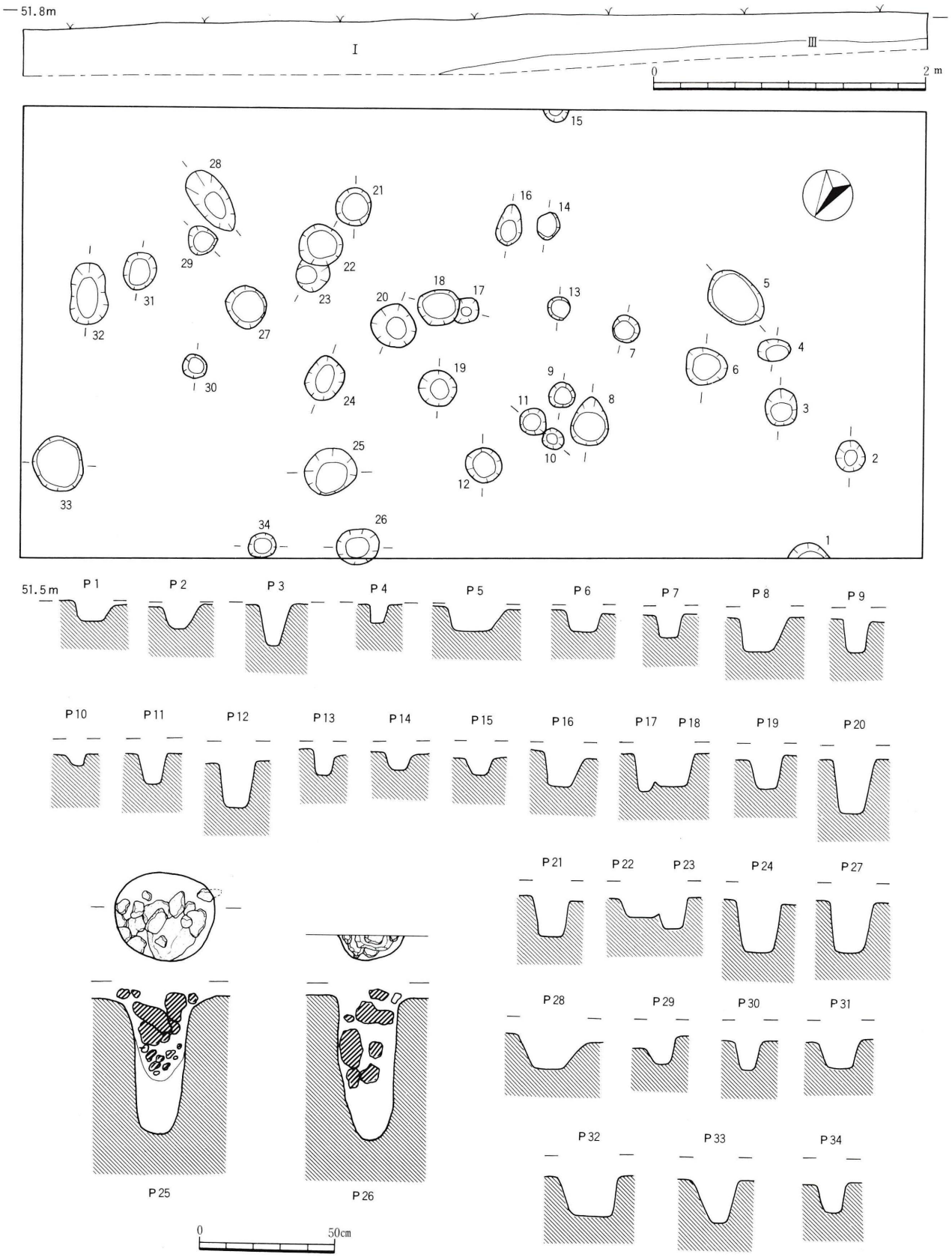
前述したように，表土以下に遺物包含層（Ⅱ層）は残存せず，遺物はすべて表土中もしくは遺構内のみからの出土である。特にＰ１からは接合資料を含め14点の遺物が集中して出土した（１～14）。１～８は須恵器であり，その良好な焼成状態から本土産の移入品と思われる。１は壺の口縁部で，その他はすべて肩部から胴部にかけての破片である。２～８はいずれも外面に細かな斜位の条痕タタキ，内面には同心円状タタキ目を残す。出土状況から考えて，これらは同一個体の可能性もある。９・10は類須恵器で，小片のため器形等は不明である。10の外面に僅かに平行タタキ痕が

観察される。11～13は瓦器質の陶器である。11は壺の頸部～肩部で，外面肩に調整痕がみえる。胎土は淡灰褐色で，大部分剝落しているものの内外面に赤色顔料が僅かに残る。12・13は胴部片である。ともに内面は荒く，外面は丁寧に調整され，11同様内外面に赤色顔料が施された痕跡がある。14は口縁部が玉縁状を呈する陶器甕である。胎土は赤茶色で，口縁周辺に一部暗茶褐色の釉が残存している。

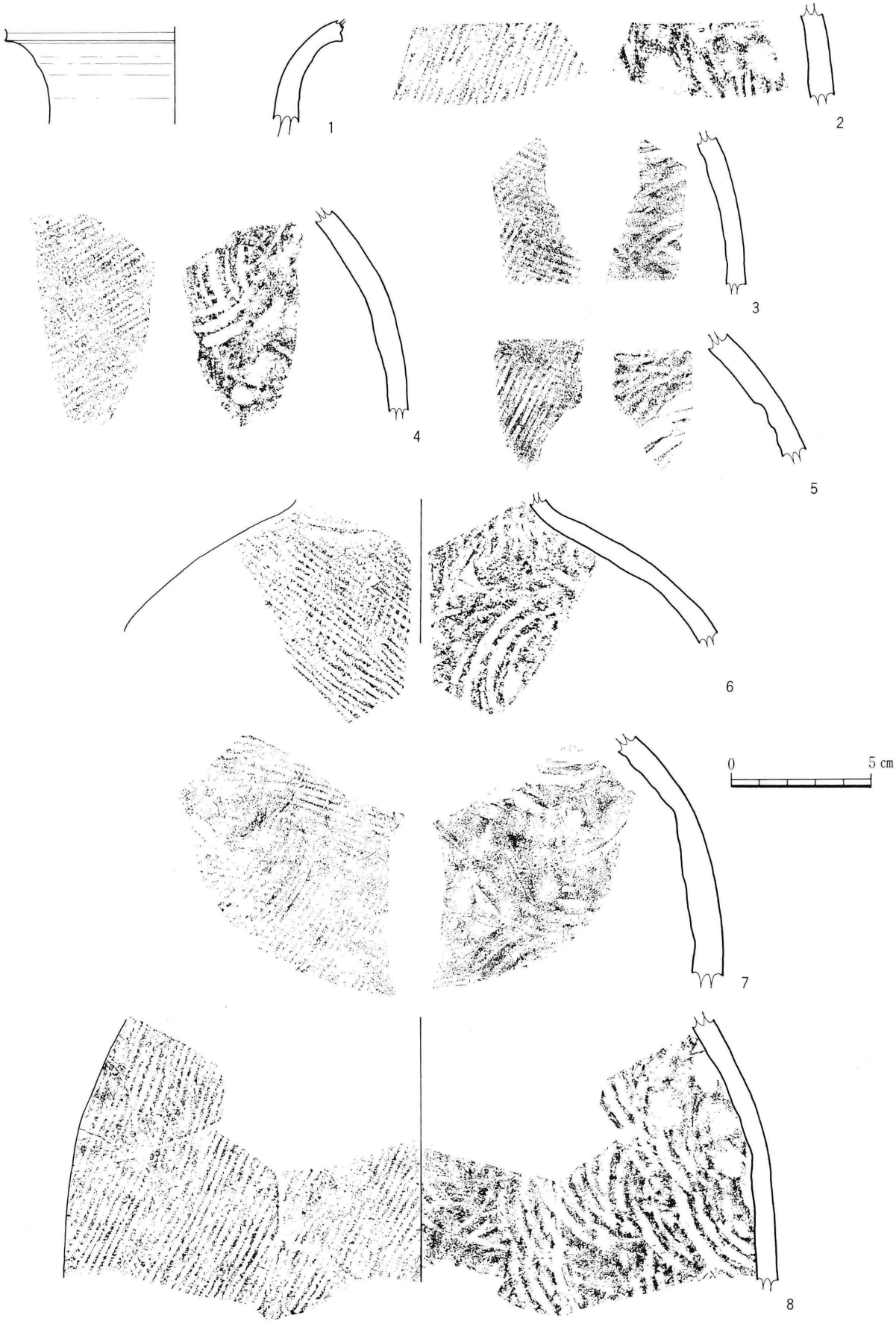
15はＰ18内より出土した陶器碗である。強い熱を受けた形跡がみられ，釉は融解して内外面ともに濁茶褐色を呈する。16はＰ３内出土の中国産白磁碗で，所謂玉縁口縁碗である。灰白色磁胎に黒色微粒子が混入し，乳白色釉が施される。内外に貫入があり，玉縁上に釉垂れがみられる。玉縁はやや太めで，12世紀頃のものである。17は表土中で採集した白磁で，灰白色磁胎に乳白色釉が施される。外面は総釉で畳付と内面は露胎である。花生あるいは壺の底部と思われる。

18・19はＰ25内出土の石器で，19は砥石の破片である。18は安山岩，19は砂岩製である。20はＰ33内出土の磨石で，敲石とも兼用している。

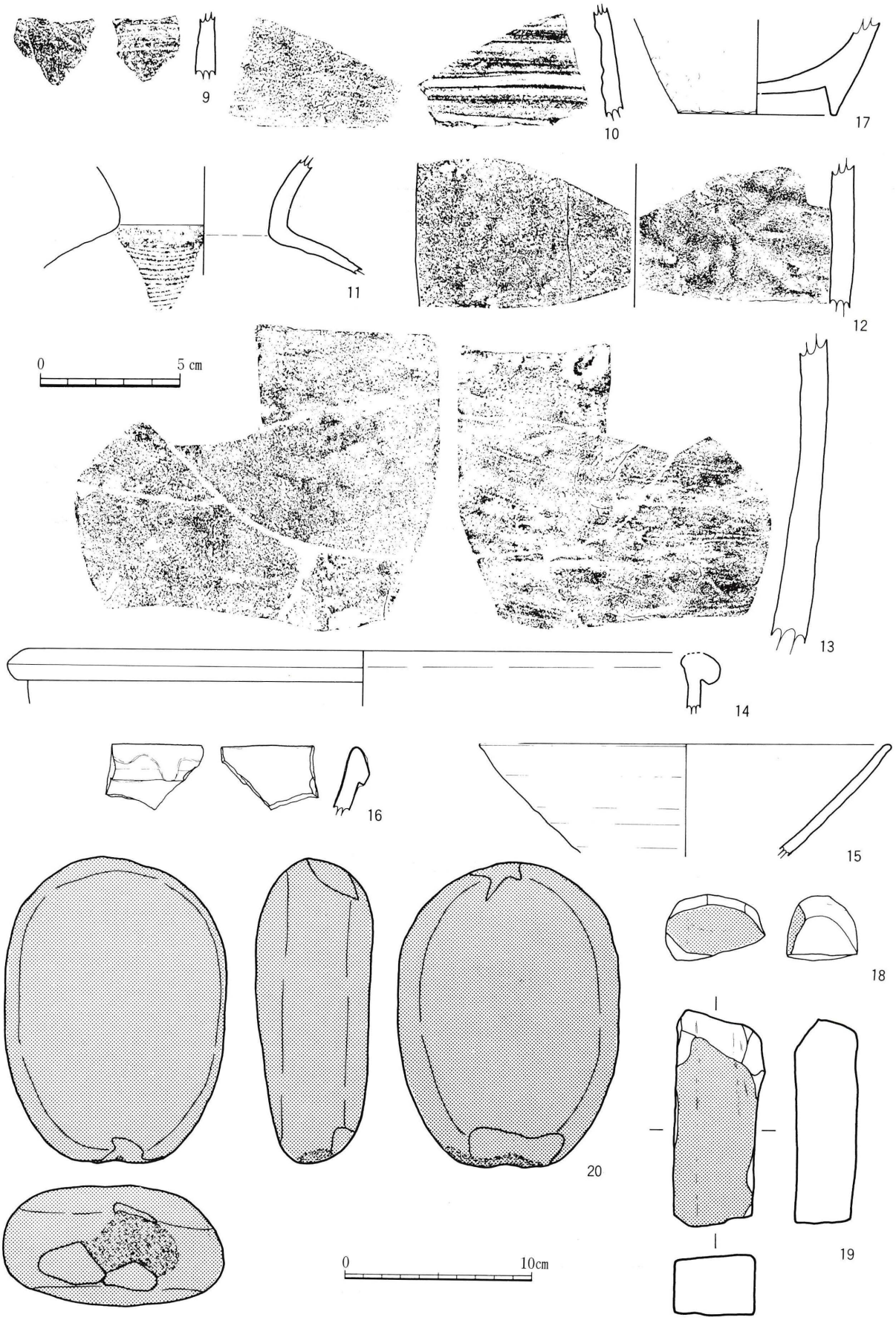
第４図　提り遺跡施工前の区画とトレンチ配置図



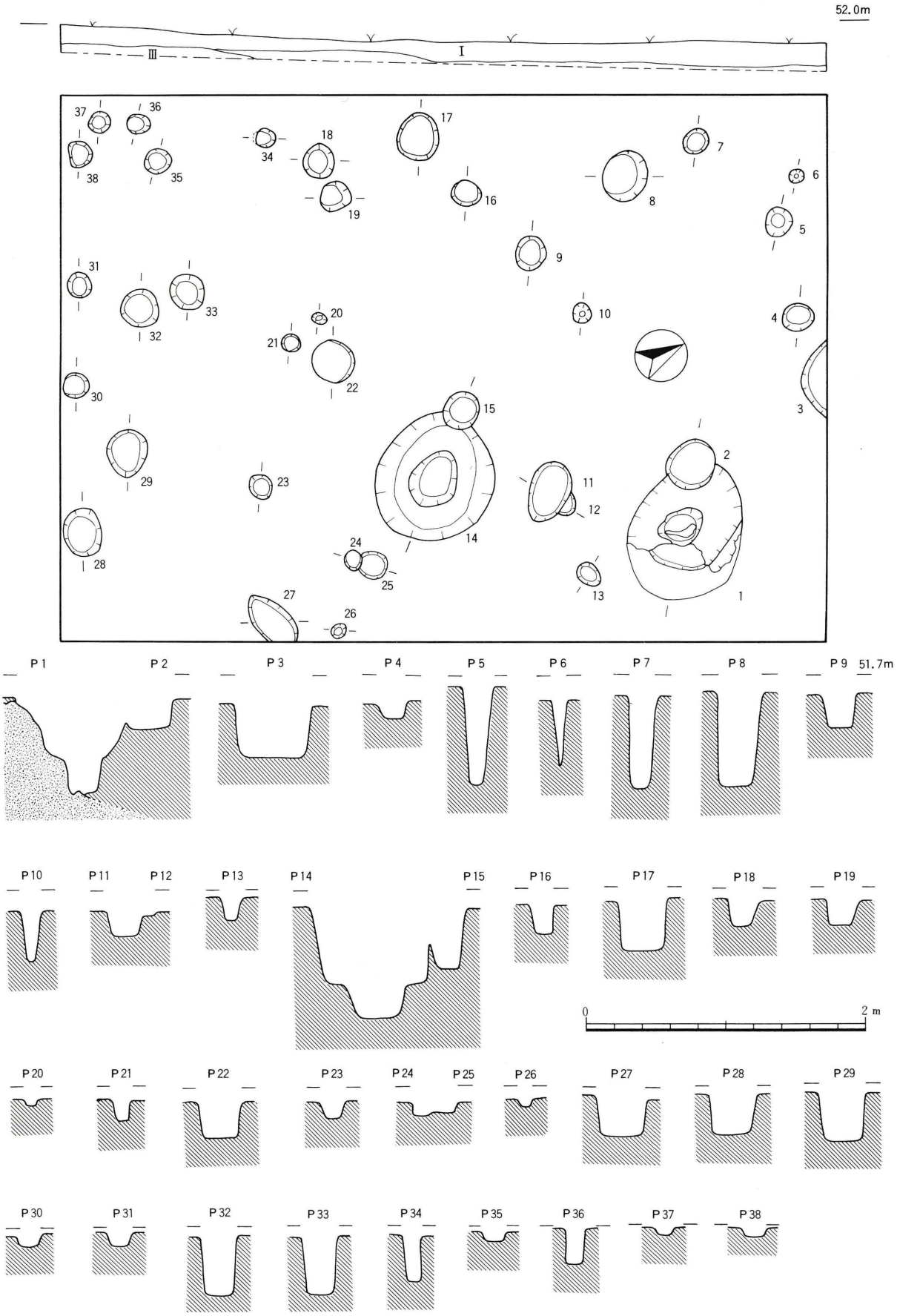
第５図　提り遺跡１トレンチ土層断面図・遺構配置図



第６図　提り遺跡１トレンチ出土遺物(1)



第７図　提り遺跡１トレンチ出土遺物(2)



第8図　提り遺跡2トレンチ土層断面図・遺構配置図

2トレンチ

1トレンチの20m北西の畑地に設定した。標高は約52mである。当初2×4mで設定したが，1トレンチ同様表土以下のⅢ層上面で多数のピット状遺構（柱穴）を検出したため4×5.3mに拡張して調査を行った。表土の厚さは20～40cmで，表土以下にはⅢ層の暗赤褐色粘質土が検出された。Ⅱ層は耕作による削平で残存せず，遺構内においてのみ確認された。

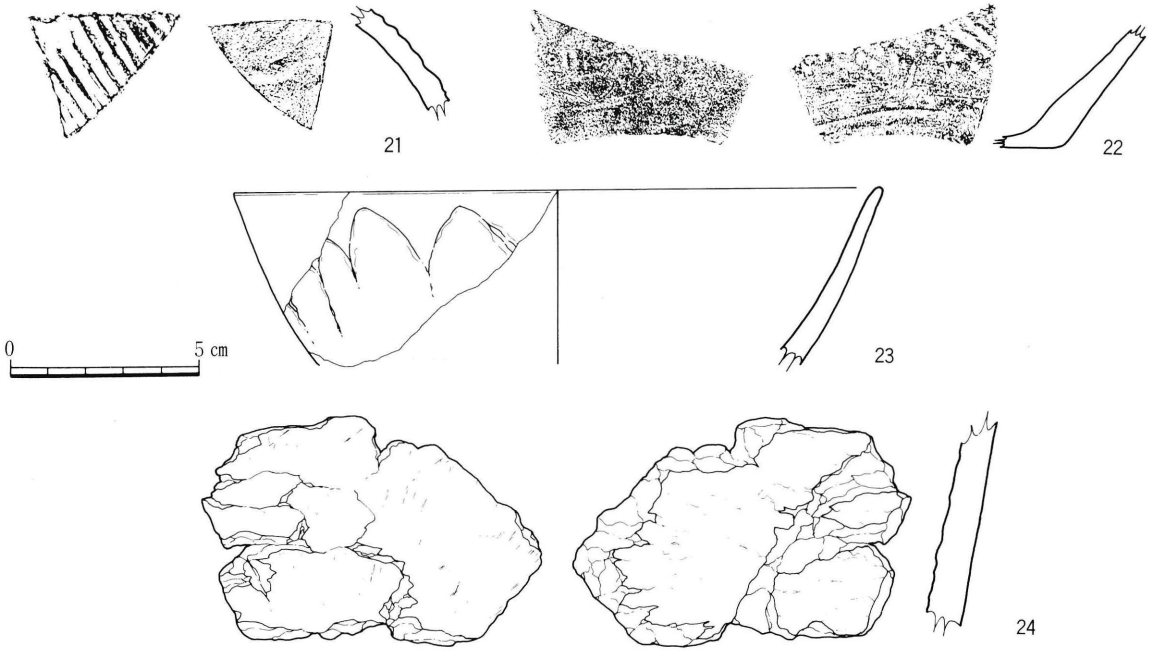
1. 遺　構

柱　穴（第8図）

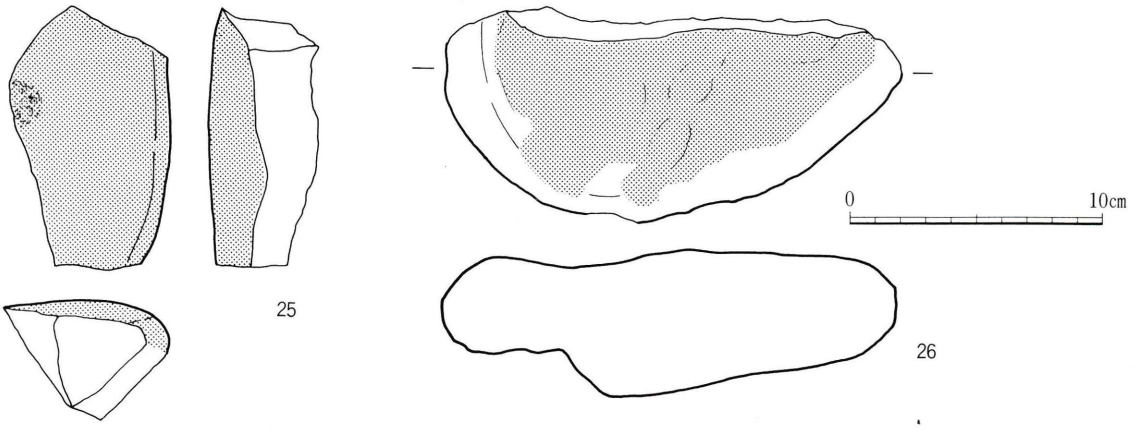
Ⅲ層上面で，計36基検出した。埋土はⅡ層の黒褐色土である。検出面における径は10～90cm，深さは8～85cmを計る。掘り込みの状態から，これらは柱穴であると思われるが，建物跡は明確に把握できなかった。形状としては，径が小さく浅いもの（P20，23～26等）・径の割に深いもの（P5～P8）・径の割に浅いもの（P3，22，27～29）・径が大きく2段掘りのもの（P1，14）に概略分類できる。P1は基盤の珊瑚塊を削って掘り込まれている。P1やP14のような柱穴の形状から判断して，かなり大規模な建物跡の存在が想定される。またP11，22，34，35内からは遺物が出土した。

2. 遺　物（第9・10図　21～26）

遺構内埋土（Ⅱ層）及び表土中出土のもの計6点を図化した。21は表土中出土の須恵器片で，外面に深い条痕タタキ，内面に同心円状タタキ目がみられる。ほぼ同様の破片が11トレンチの包含層（Ⅱ層）より出土している（45）。22は類須恵器の底部で，P11内より出土した。内面に格子状タタキ目がみられる。23はP22内出土の青磁碗で，磁胎は灰褐色を呈する。器面の釉は内外ともに二次的焼成を受けて著しく融解しているが，胴部に鎬蓮弁文が微かに観察される。13世紀頃の龍泉窯系磁器と思われる。24はP35内出土の滑石製石鍋で，外面は丁寧に研磨されている。底部である可能性もある。25はP22内出土の磨石の破片，26は表土中出土の石皿である。



第9図　提り遺跡2トレンチ出土遺物(1)

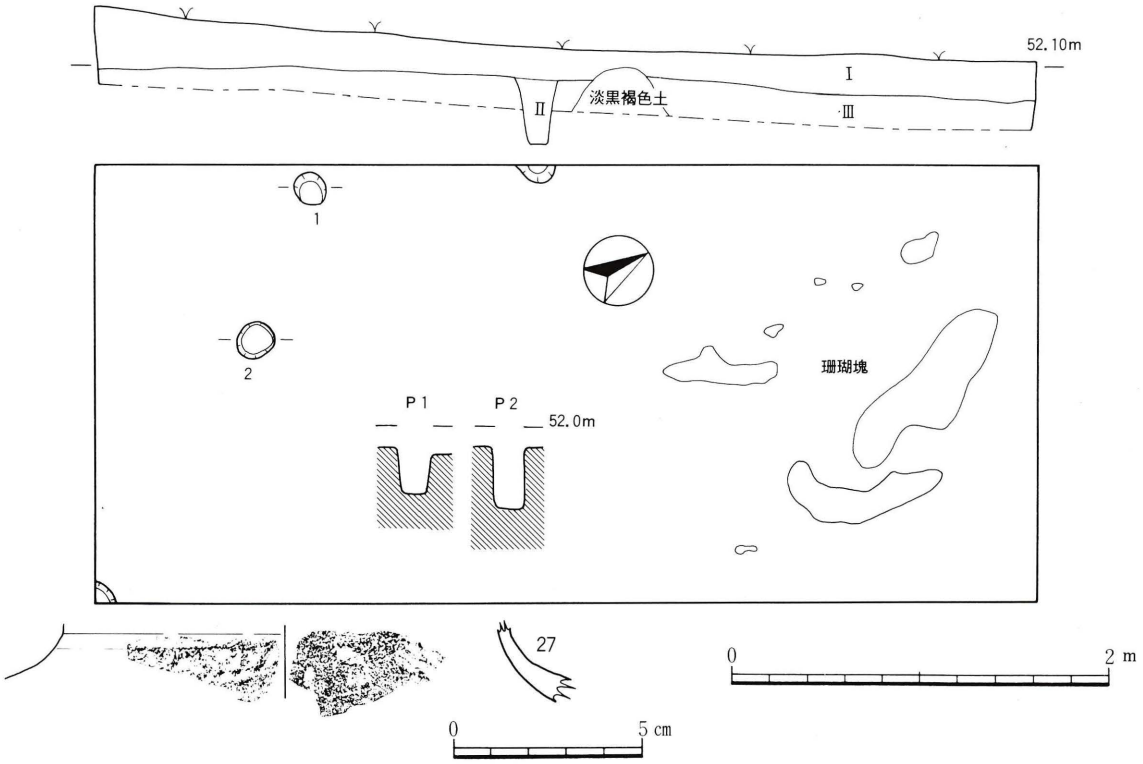


第10図　提り遺跡２トレンチ出土遺物(2)

３トレンチ（第11図　27）

２トレンチの北西約30ｍ，標高約52ｍの畑地に2.5×５ｍで設定した。地形は北に向かって緩やかに傾斜している。表土の厚さは15～35cmで，表土以下にはⅢ層が堆積し，約20cm掘り下げたところで北側部分に珊瑚塊が検出された。

Ⅲ層上面で４基の柱穴と思われる遺構を検出した。径は18～20cm，深さは25～36cmで，埋土はⅡ層である。掘り込みはしっかりしているが，建物跡は明確にできなかった。また遺構内からの遺物の出土はみられなかったが，表土中より類須恵器壺片（27）が採集された。頸部に左下がりの平行タタキ目が観察できる。



第11図　提り遺跡３トレンチ土層断面図・遺構配置図・表層出土遺物

4トレンチ（第12図）

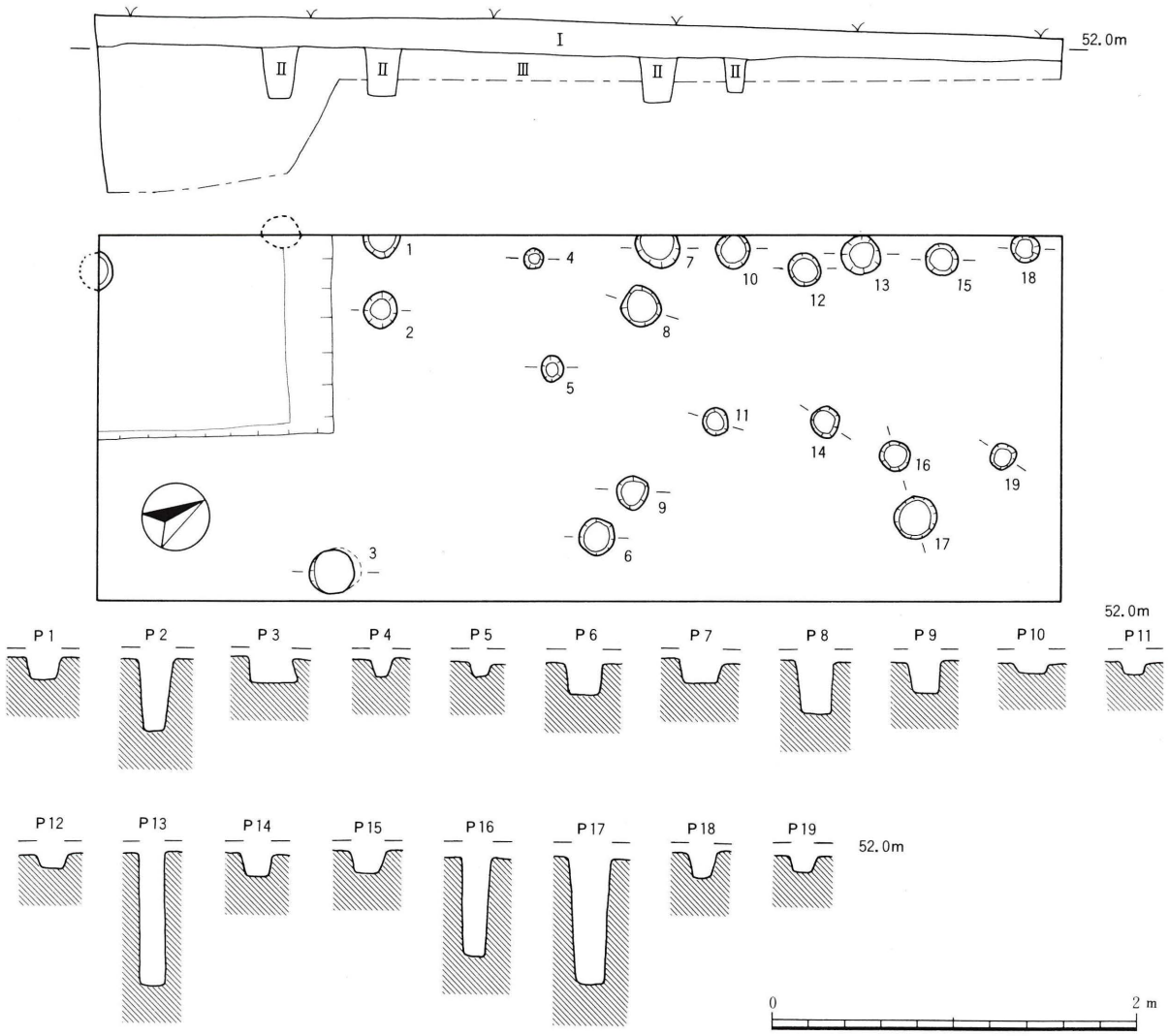
3トレンチの北西約60m，標高約52mの牧草地に2×5mで設定した。表土の厚さは平均して約20cmである。表土以下にはⅢ層が堆積し，上面からは柱穴と思われる遺構を21基検出した（壁面で確認されたものを含む）。Ⅱ層は遺構内においてのみ確認された。

柱穴の径は10～25cm，深さは5～70cmで，特にP13，16，17は径の大きさの割に深く掘り込まれている。明確な建物跡は把握できず，遺構内からの遺物の出土もみられなかった。

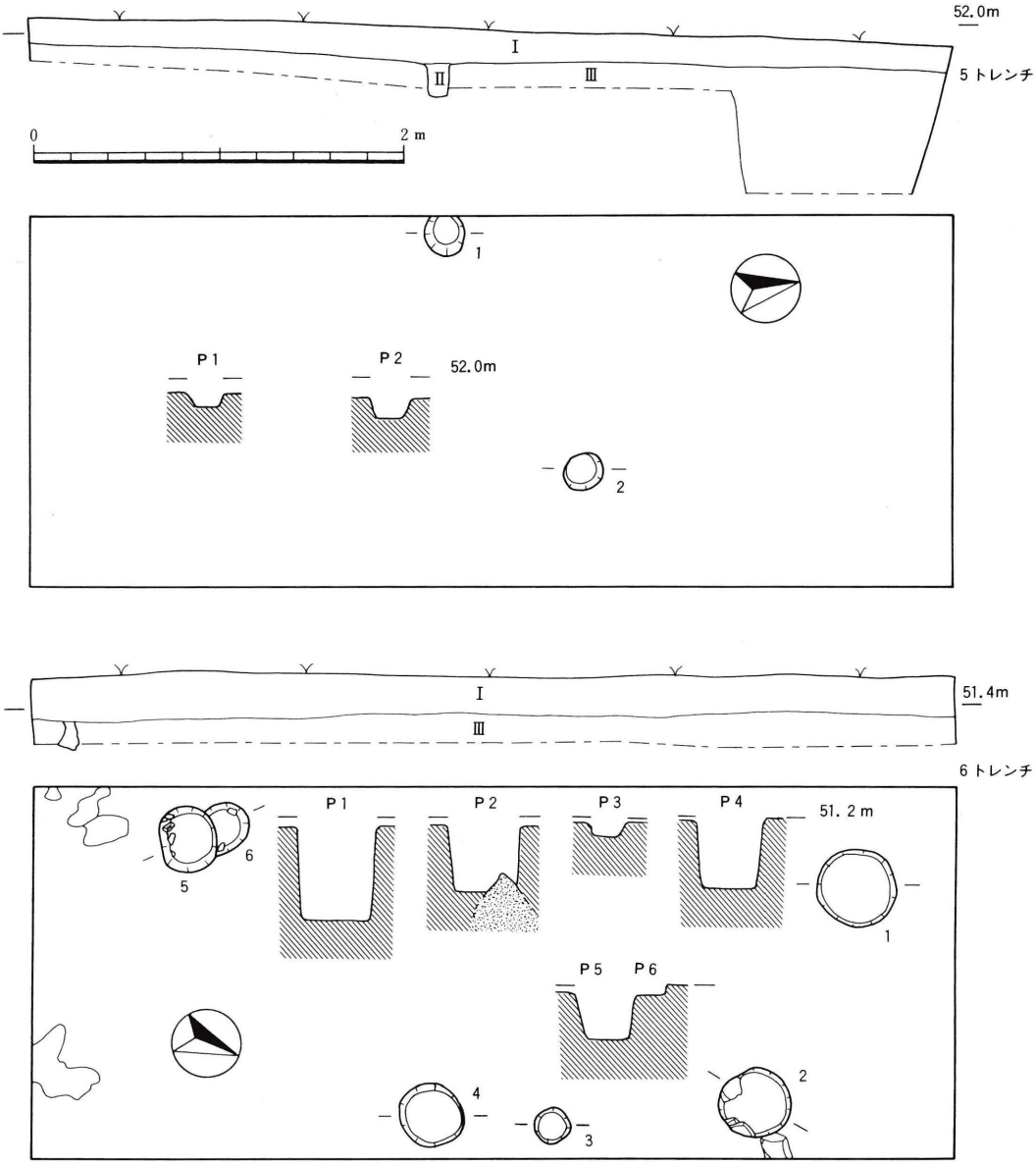
5トレンチ（第13図）

対象地北西端の畑地に2×5mで設定した。標高は約52mである。地形は北に向かって緩やかに傾斜している。表土の厚さは15～20cmで，表土以下にはⅢ層の堆積がみられ，Ⅱ層は削平されて残存しない。

Ⅲ層上面からは柱穴と思われる遺構が2基検出された。径はともに20cm，深さは10と15cmで他のトレンチのものと比較して浅い。埋土はⅡ層で，遺構内から遺物の出土はみられなかった。



第12図　提り遺跡4トレンチ土層断面図・遺構配置図



第13図　提り遺跡5，6トレンチ土層断面図・遺構配置図

6トレンチ

3トレンチの北約30m，標高約51.5mの牧草地に2×5mで設定した。表土の厚さは平均して約22cmである。表土以下にはⅢ層が堆積し，表土を剝いだ時点で珊瑚塊が出土した。また上面からは柱穴と思われる遺構を6基検出した。遺物包含層であるⅡ層は遺構内においてのみ確認され，遺構内より4点の遺物が出土した。

1.　遺　構

柱　穴（第13図）

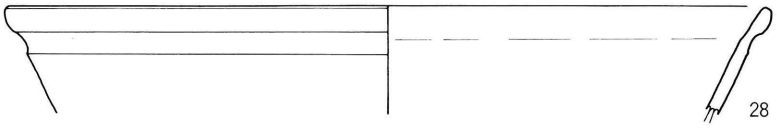
Ⅲ層上面で計6基検出した。うちP5・P6は切合い関係にある。径は10～20cm，深さは6～50cmで，P1，2，4，5はほぼ同様の形態を呈し，他トレンチの柱穴の多くと比較して径・深さの割合が大きい。遺構内埋土はⅡ層で，P1，2内より遺物が出土している。

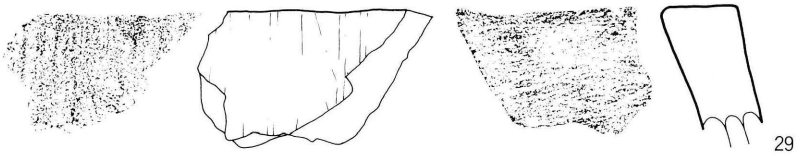
2. 遺　物（第14・15図　28～31）

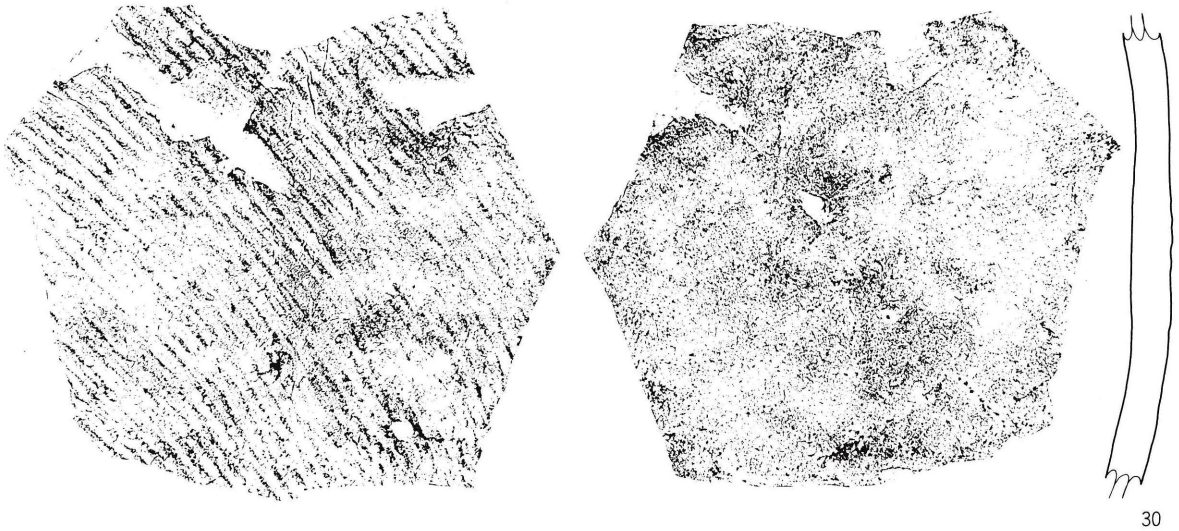
28は表土を剝いだ際にⅢ層上面で確認された。耕作により削平されたⅡ層中に包含されていたものと思われる。白磁の玉縁口縁碗で，口縁部直下の外面に太い凹線を巡らすことで玉縁を強調している。１トレンチ出土のものと比較して玉縁が小さい。11世紀末～12世紀前半の中国産白磁である。

29・30はともにＰ２内より出土した。29は滑石製石鍋で，やや内弯する口縁部をもつ。外面は煤により黒褐色を呈する。外面に縦方向，内面に横方向の調整痕が観察される。30は須恵器の胴部片である。外面に太く深い斜位の条痕タタキ目が，内面には篦状工具によるナデ調整痕がみられる。胎土や器面調整などから，他トレンチ出土の須恵器とは異なる窯のものと思われる。

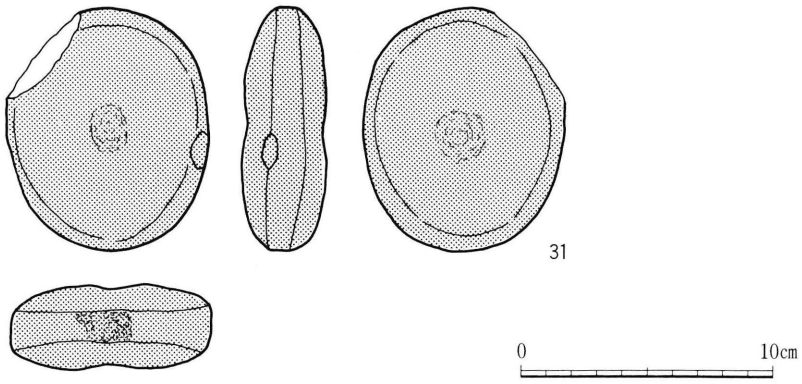
31はＰ１内出土の磨石である。敲石，凹石とも兼用している。







第14図　提り遺跡６トレンチ出土遺物(1)



第15図　提り遺跡６トレンチ出土遺物(2)

７トレンチ

６トレンチの南西約30ｍ，４トレンチの南東約25ｍに２×６ｍで設定した。標高は約53ｍである。表土を削除した時点で，Ⅲ層の明茶褐色土とともに基盤層の珊瑚塊を検出した。Ⅱ層は削平されて残存しない。Ⅲ層上面から遺構は検出されず，遺物の出土もみられなかった。

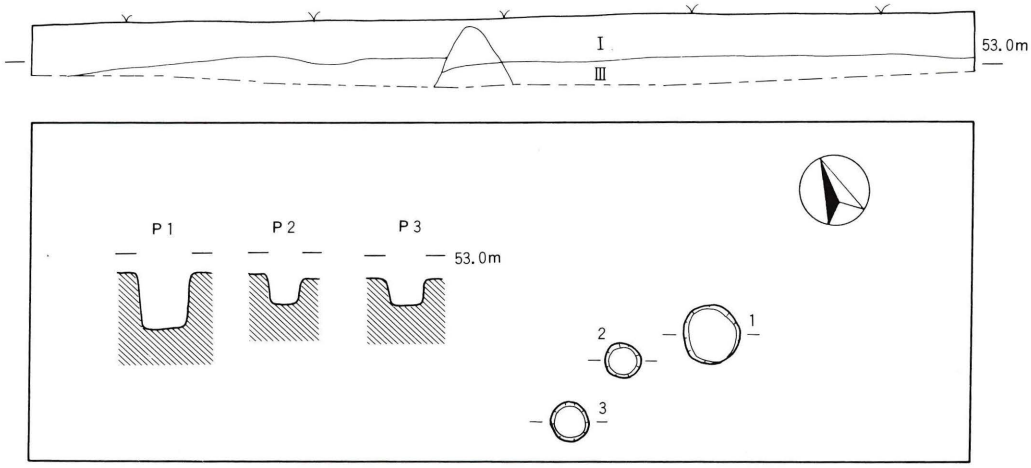
８トレンチ（第16図）

４トレンチの南西約30ｍ，５トレンチの東約25ｍに２×５ｍで設定した。標高は約53ｍである。表土の厚さは20～25㎝で，表土以下にはⅢ層の堆積がみられ，他トレンチ同様Ⅱ層は削平されて残存しない。

Ⅲ層上面からは柱穴と思われる遺構が３基検出された。径20～30㎝，深さは15～30㎝である。埋土はⅡ層で，遺構内から遺物は出土しなかった。

９トレンチ

８トレンチの南東約30ｍに２×５ｍで設定した。標高は約53ｍである。７トレンチと同じく，表土を削除した時点で基盤層の珊瑚塊を検出した。表土以下はⅢ層で，Ⅱ層は削平されて残存しない。Ⅲ層上面から遺構は検出されず，遺物の出土もみられなかった。

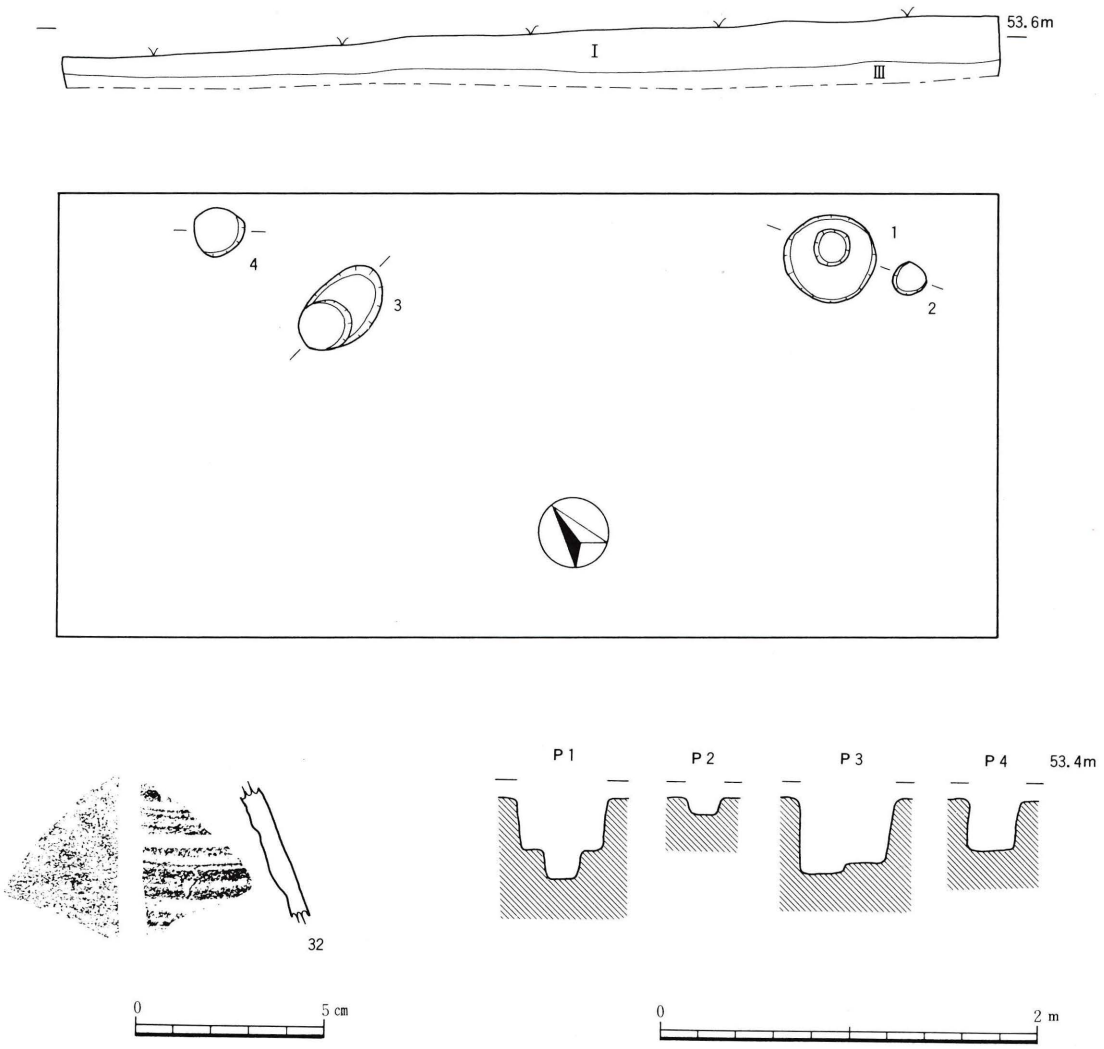


第16図　提り遺跡８トレンチ土層断面図・遺構配置図

10トレンチ（第17図　32）

３トレンチの南東約25ｍ，標高約52ｍの畑地に２×５ｍで設定した。表土の厚さは10～20㎝である。表土以下にはⅢ層が堆積し，上面からは柱穴と思われる遺構を４基検出した。遺構内の埋土ははすべてⅡ層である。

柱穴の径は15～50㎝，深さは10～40㎝である。Ｐ１は２段掘りになっており，他のピットも壁面がしっかりと掘り込まれている。Ｐ１内から須恵器，Ｐ２内から類須恵器が出土したが，小片のため図化は行わなかった。32はＰ３内出土の類須恵器である。外面にタタキ目等の痕跡はなく，内面に横方向の深い調整痕がみられる。



第17図　提り遺跡10トレンチ土層断面図・遺構配置図・出土遺物

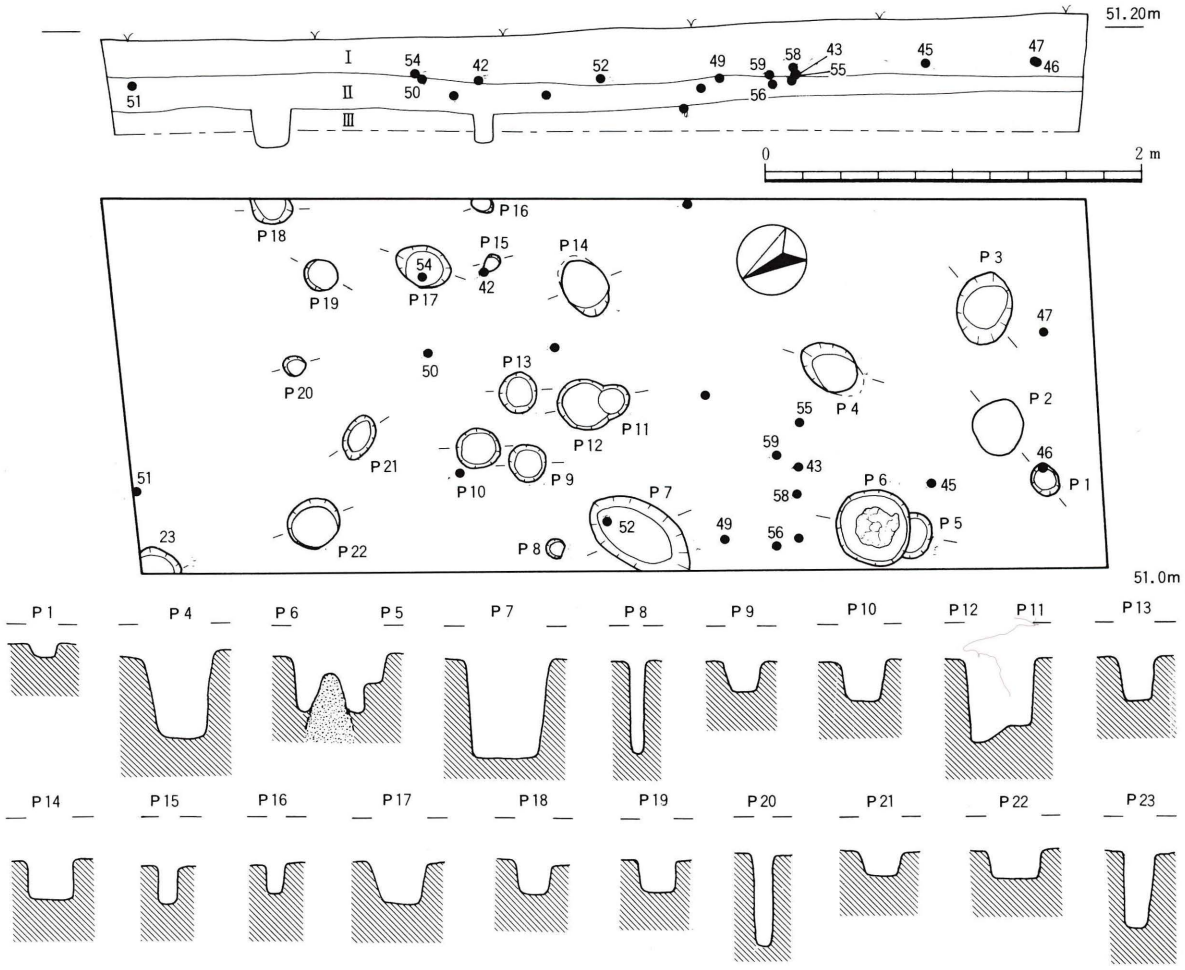
11トレンチ

1トレンチで遺構・遺物が集中して検出され，広がりを確認するため1トレンチの東約20mに2×5mで設定した。調査対象区である微高地の東端にあたり，トレンチの東側で急に落ち込む低い崖状の地形となる。標高は約51mである。表土の厚さは30～20cmで，表土以下には唯一Ⅱ層が残存していた。Ⅱ層の厚さは5～20cmで，最下面（Ⅲ層上面）において23基の柱穴と思われる遺構を検出した。Ⅱ層中からは遺構内を含めて35点の遺物が出土した。

1. 遺　構

柱　穴（第18図）

他のトレンチ同様Ⅲ層上面で検出し，埋土はⅡ層である。平面プランはほぼ円形もしくは楕円形を呈し，径は15～40cm，深さは10～60cmである。形状としては，比較的径が大きく深いもの（P2～4，6，11，12），径の割に非常に深いもの（P8，20，23），その他の径・深さともに20cm前後のものという概略3タイプに分類できる。各タイプに属するピットのサイズが，ほぼ同様である点が興味深い。これらの大部分は柱穴と思われるが，狭い範囲のトレンチのため建物跡は把握できなかった。P2内からは，検出面から深さ9～20cmにかけて，獣骨（牛肋骨）及び甕形土器片が出土した。これらについての詳細は次項及び第Ⅵ章で詳述するが，この土器が蔵骨器であるとすればP2は埋納を目的として掘られた可能性がある。その他P3，7，11内からも遺物が出土している。



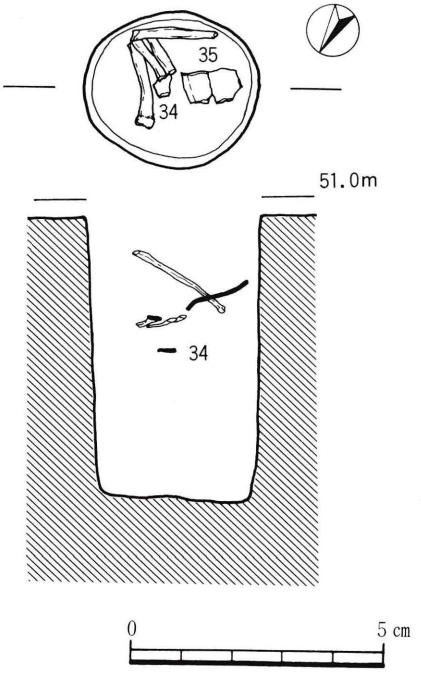
第18図　提り遺跡11トレンチ土層断面図・遺構配置図・遺物出土状況

2. 遺　物

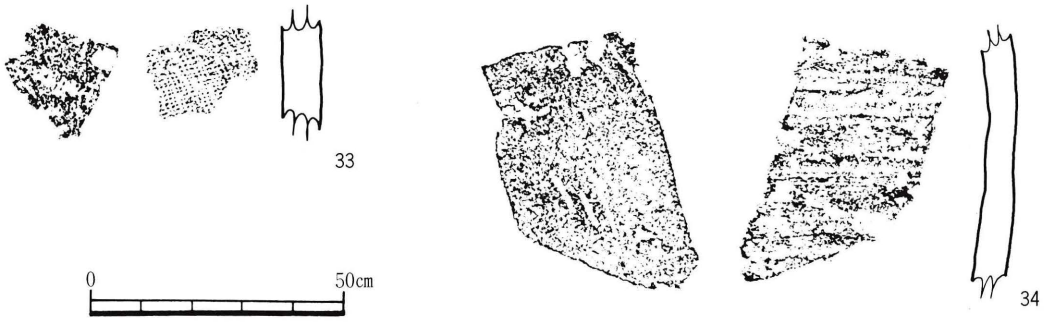
遺構内及び包含層出土の遺物35点のうち，実測可能な28点を図化した。以下，遺構内・包含層に分けて，それぞれより出土した遺物について述べていく。

Ｐ２内出土遺物（第20・21図　33～35）

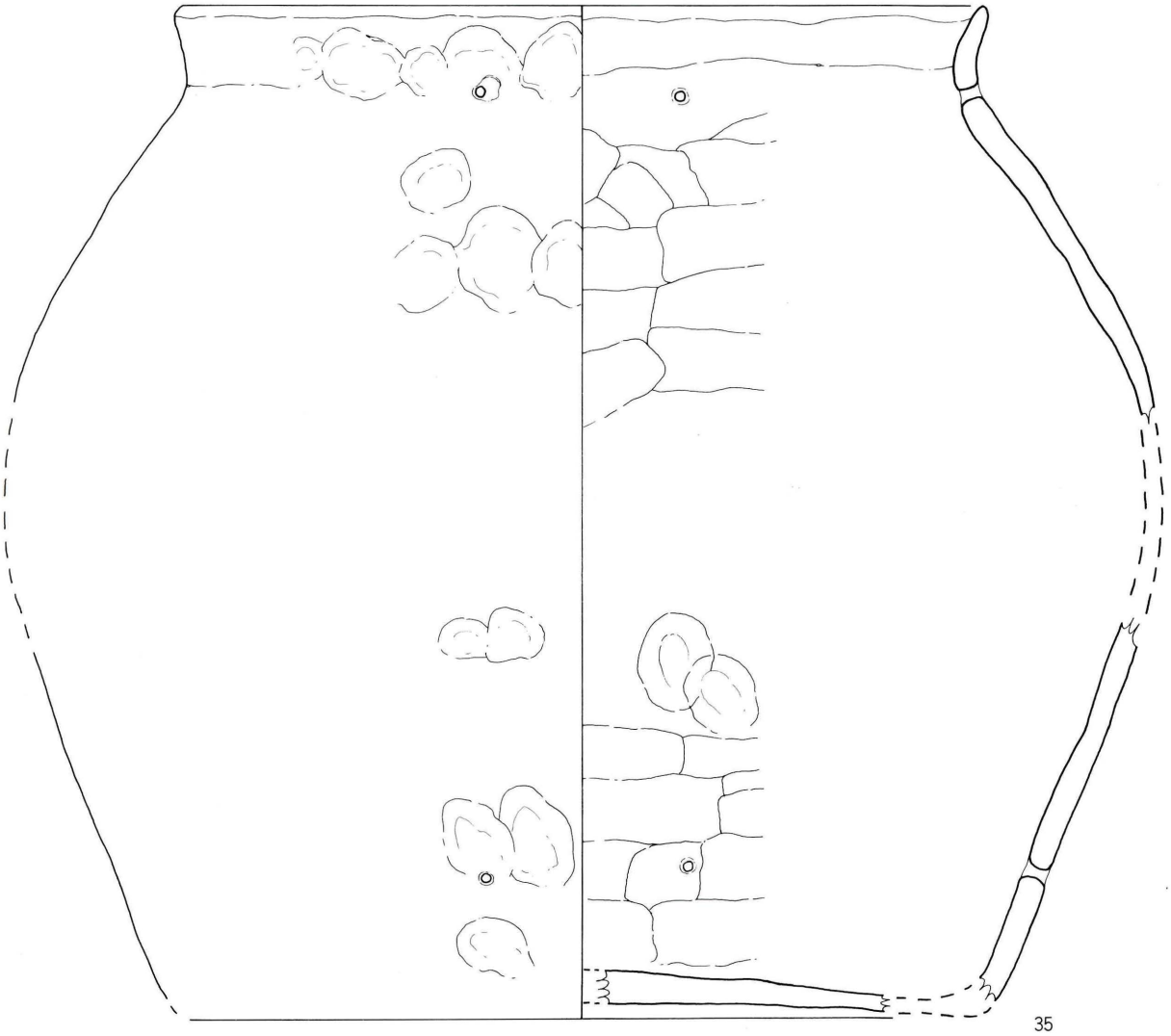
33は内面に布目圧痕をもつ土器で，胎土は小石を多く含む。小片のため器形は不明である。34は須恵器と思われる。外面に短い平行タタキ，内面に横方向のナデ調整痕がみられる。胎土中に大粒の長石が多く含まれる。焼成はかなり粗いが，断面に類須恵器特有の酸化による赤褐色部分は観察されない。35は獣骨に共伴して出土した甕である。破片が完全に接合しなかったため各部の大きさは推定であるが，口径・底径ともに22cm，器高28cm，胴部最大径32cmを計るものと思われる。底部は中心で肥厚し，やや上げ底である。頸部の付け根と底部付近に，同じ穿孔具によるものとみられる径３mmの孔が穿たれている。器面は内外とも全体に凹凸があり，指頭による押圧成形の後ナデ調整を施した形跡がみられる。特徴的なのは，胎土に石英・長石・金雲母等のほかに滑石が混入する点である。形態的には琉球文化圏に広く分布するグスク土器の範疇に属する。



第19図　提り遺跡11トレンチＰ２遺物出土状況



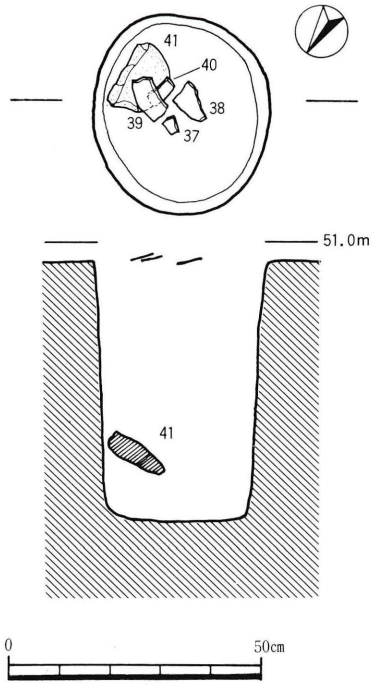
第20図　提り遺跡11トレンチＰ２内出土遺物(1)



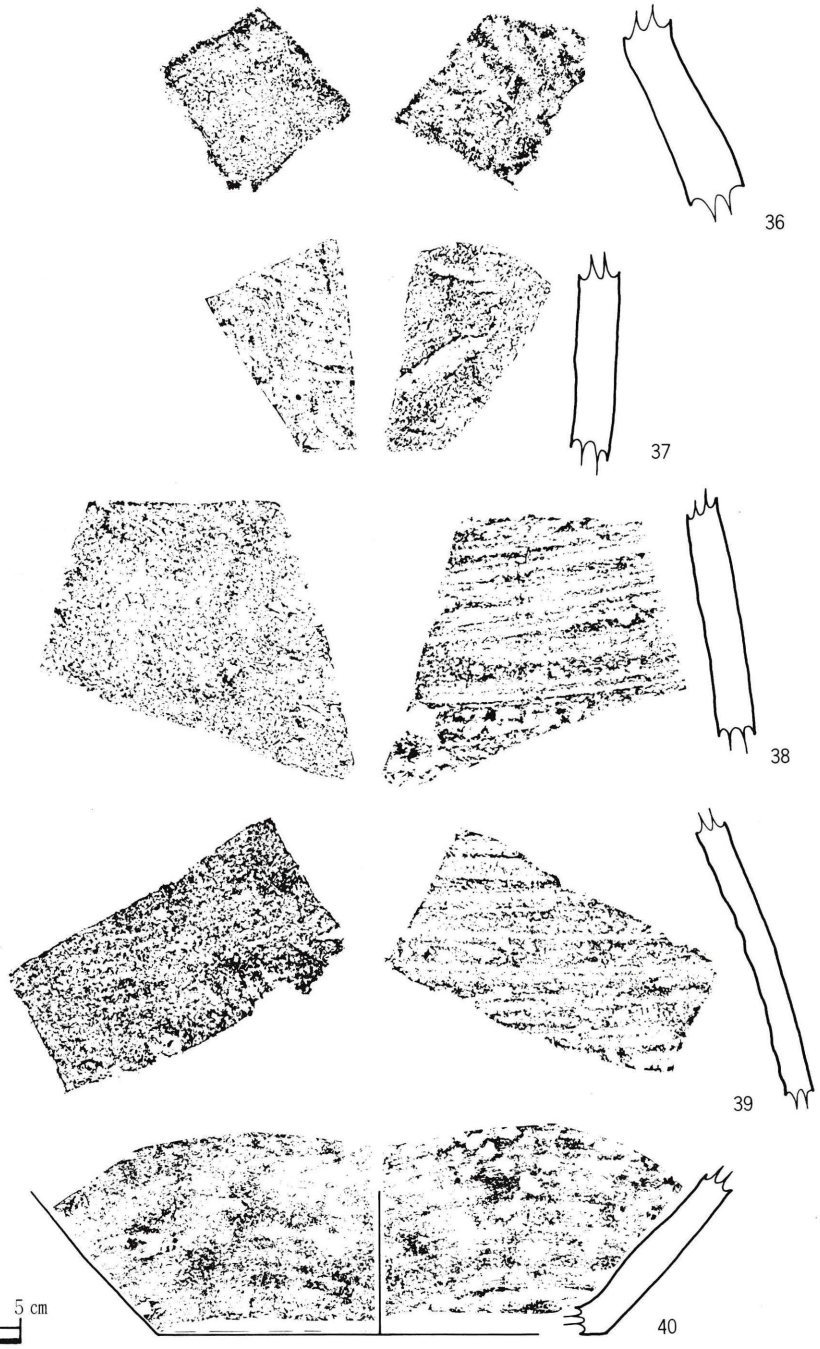
第21図　提り遺跡11トレンチＰ２内出土遺物(2)

Ｐ３内出土遺物（第23・24図　36～41）

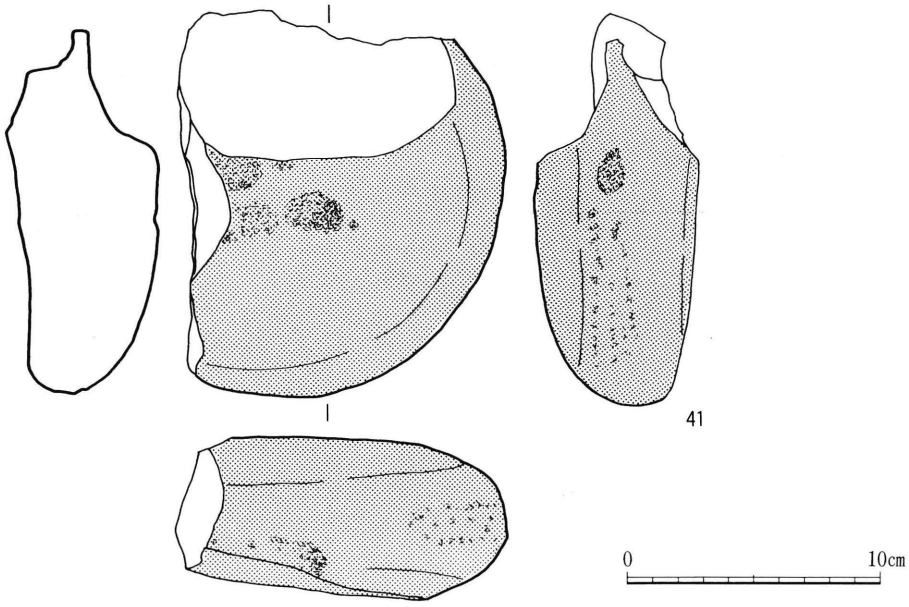
36はＰ２内出土の33と同種のグスク土器である。胎土にはやはり滑石が混入する。37～40は須恵器であるがそれぞれに胎土・焼成・器面調整が異なる。37はきめ細かな胎土で焼成も良好，外面に綾杉状タタキ，内面に同心円状タタキ目がみられる。38・39はＰ２内出土の34と同種の須恵器である。胎土や調整等すべてほぼ同様であるため，これらは同一個体の可能性がある。40は底部片で，内面に格子状タタキ目が観察される。胎土はきめ細かく，焼成も極めて良好である。41は磨石である。他の遺物が遺構検出面すれすれに出土しているのに対し，遺構の底付近より出土している。破損しているが，全体的によく使い込まれて磨耗している。



第22図　提り遺跡11トレンチ
Ｐ３遺物出土状況



第23図　提り遺跡11トレンチＰ３内出土遺物(1)



第24図　提り遺跡11トレンチＰ３内出土遺物(2)

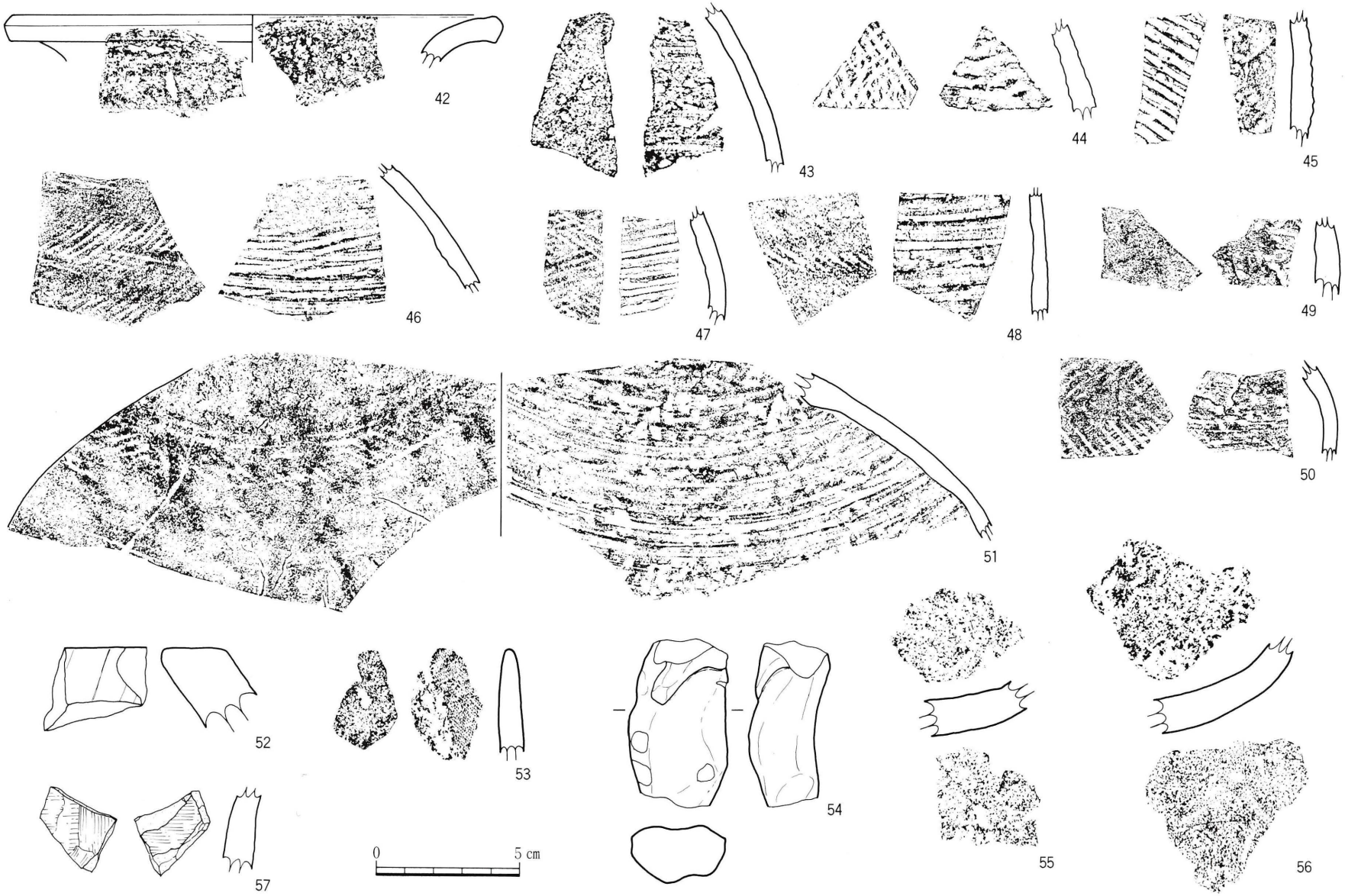
その他の包含層出土遺物（第25・26図　42～60）

42～45は須恵器である。42は壺の口縁部である。42・43は胎土や焼成の具合が，前述の34・38・39と類似し，特に43はそれらと同一個体の可能性がある。44は外面に交差する平行タタキ，内面に同心円状タタキ目をもつ。45は前述した２トレンチ表層出土の21と同種のものである。46～51は類須恵器である。46・47はともに外面に綾杉状タタキ目をもち，内面は格子状タタキのナデ消しがみられる。さらに内面の還元焼成が不十分な点も共通している。51は壺の肩部と思われる。ナデ消されて不明瞭であるが，外面に斜位の平行タタキ，内面に格子状タタキ目がみられる。52は滑石製石鍋の口縁部で，かなり大きな角度で内弯する。53はＰ２内出土の35と同様の，内面に布目圧痕をもつ土器の口縁部で，胎土・色調は似るが，布目が若干異なる。54は土器の一部と思われるが，不明である。把手のようにもみえる。赤褐色を呈し，胎土はきめが細かい。55・56は同一個体と思われる淡茶褐色の土器片である。傾きについては正確でない。胎土は粗く，小石を多量に含む。湾曲した器壁の印象から，グスク土器の器種のひとつである石鍋模倣土器の可能性もある。57は陶器片である。茶褐色の胎土で，磁器のように硬く焼成されている。

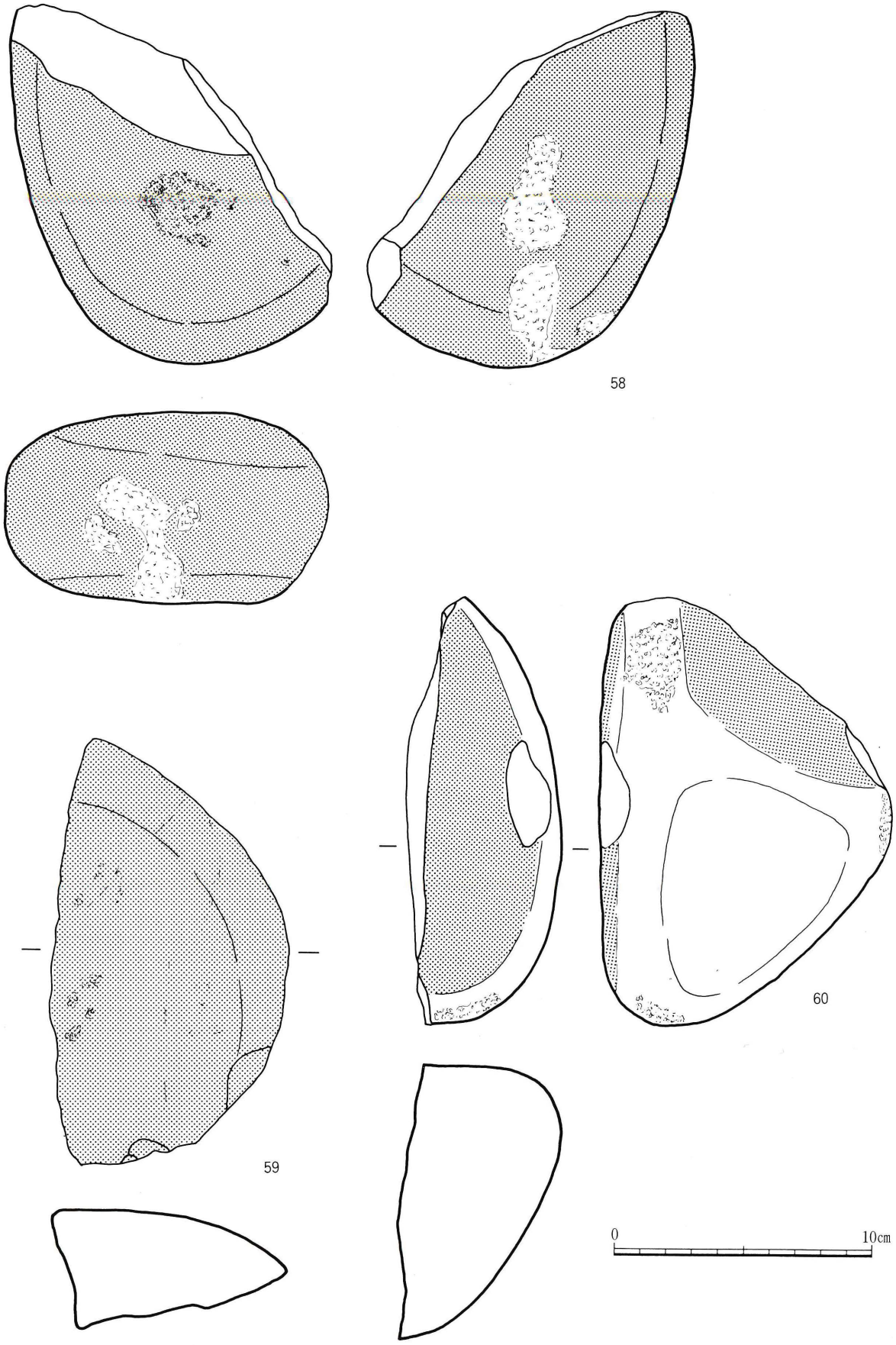
58～60は磨石である。すべて安山岩を利用したもので，58・60は敲石とも兼用している。

12トレンチ

遺跡の広がりを確認するため，２トレンチの北約20ｍに２×４ｍで設定した。標高は約51ｍである。表土を20cmほど剝いだところで珊瑚塊を検出した。Ⅱ層は削平されて残存せず，遺構・遺物も確認されなかった。



第25図　提り遺跡11トレンチ包含層（Ⅱ層）出土遺物(1)



第26図　提り遺跡11トレンチ包含層（Ⅱ層）出土遺物(2)

第３表　提り遺跡出土遺物観察表(1)

挿図番号	トレンチ番号	遺物番号	層	器種	部位	胎土等	調整・文様	色調	焼成	備考
6	1	1	Ⅱ	須恵器壺	口縁	長石・石英 きめが細かい	内・外面ともに回転ナデ調整	淡青灰色	良	P 1
		2	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		3	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		4	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		5	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		6	Ⅱ	須恵器	肩部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		7	Ⅱ	須恵器	肩～胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
		8	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英 きめが細かい	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	淡青灰色	良	P 1
7		9	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石・石英	外：平行タタキ(ナデ消) 内：回転ナデ	青灰色	普	P 1
		10	Ⅱ	類須恵器	胴？	長石・石英	外：ナデ 内：回転ナデ	青灰色	普	P 1
		11	Ⅱ	瓦質土器壺	頸部	長石・石英	外面に工具ナデ痕	淡灰褐色	普	P 1　内外面に赤色顔料
		12	Ⅱ	瓦質土器	胴部	長石・石英 角閃石・小石	内・外面ともに横方向のナデ	外：淡赤褐色 内：灰褐色	粗	P 1　内外面に赤色顔料
		13	Ⅱ	瓦質土器	胴部	長石・石英 角閃石・小石	内・外面ともに横方向のナデ	外：淡赤褐色 内：灰褐色	粗	P 1　内外面に赤色顔料
		14	Ⅱ	陶器甕	口縁	赤茶色	玉縁口縁	暗茶褐色釉	良	P 1
		15	Ⅱ	陶器碗	口縁	灰白色		二次的焼成により不明	普	P 18
		16	Ⅱ	白磁碗	口縁	灰白色	玉縁口縁	乳白色釉	良	P 3
		17	表	白磁	底部	灰白色		乳白色釉	良	
9	2	21	表	須恵器	肩？	長石・石英・角閃石	外：条痕タタキ 内：同心円条タタキ	外：緑灰色 内：灰褐色	良	
		22	Ⅱ	類須恵器	底部	長石・石英	外：平行タタキ(ナデ消) 内：格子状タタキ	青灰色	普	P 11
		23	Ⅱ	青磁碗	口縁	灰褐色	鎬蓮弁文	二次的焼成により不明	良	P 22　竜泉窯系
		24	Ⅱ	石鍋	底？	滑石	外面は研磨調整	暗銀色		P 35
11	3	27	表	類須恵器	頸部	長石	外：平行タタキ(ナデ消) 内：回転ナデ	外：濃青灰色 内：淡青灰色	普	
14	6	28	Ⅱ	白磁碗	口縁	灰白色	玉縁口縁	乳白色釉	良	
		29	Ⅱ	石鍋	口縁	滑石	内・外面ともに丁寧な研磨調整	青銀色		P 2
		30	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英・角閃石	外：条痕タタキ 内：工具ナデ	灰白色	良	P 2
17	10	32	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石・小石	外：タタキのナデ消？ 内：回転ナデ	濃青灰色	普	P 3
20	11	33	Ⅱ	布目圧痕土器	胴？	長石･石英･角閃石･雲母･小石	外：ナデ 内：布目圧痕	外：茶褐色 内：灰褐色	粗	P 2 製塩土器？
		34	Ⅱ	須恵器	胴部	長石を多く含む	外：平行タタキ(ナデ消) 内：回転ナデ	淡青灰色	粗	P 2
21		35	Ⅱ	グスク土器		長石・石英・雲母・滑石	外：押圧，ナデ 内：押圧，工具ナデ	暗茶褐色	良	P 2　蔵骨器？
23		36	Ⅱ	グスク土器	肩？	長石・石英・雲母・滑石		暗茶褐色	良	P 3
		37	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英・雲母	外：綾杉状タタキ 内：同心円状タタキ	青灰色	良	P 3
		38	Ⅱ	須恵器	胴部	長石を多く含む	外：平行タタキ(ナデ消) 内：回転ナデ	淡青灰色	粗	P 3
		39	Ⅱ	須恵器	胴部	長石を多く含む	外：平行タタキ(ナデ消) 内：回転ナデ	淡青灰色	粗	P 3
		40	Ⅱ	須恵器	底部	長石・角閃石	外：回転ナデ 内：格子状タタキ(ナデ消)	灰褐色	良	P 3

第４表　提り遺跡出土遺物観察表(2)

挿図番号	トレンチ番号	遺物番号	層	器種	部位	胎土等	調整・文様	色調	焼成	備考
25	11	42	Ⅱ	須恵器壺	口縁	長石を多く含む	内・外ともに回転ナデ	淡青灰色	粗	
		43	Ⅱ	須恵器	胴部	長石を多く含む	外：タタキのナデ消？ 内：回転ナデ	淡青灰色	粗	
		44	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・角閃石・雲母	外：平行タタキ 内：同心円状タタキ	淡灰褐色	普	
		45	Ⅱ	須恵器	胴部	長石・石英・角閃石	外：条痕タタキ 内：同心円状タタキ	外：緑灰色 内：灰褐色	粗	
		46	Ⅱ	類須恵器	肩？	長石・角閃石	外：綾杉状タタキ 内：格子状タタキ（ナデ消）	外：青灰色 内：赤茶褐色	粗	
		47	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石・角閃石	外：綾杉状タタキ 内：格子状タタキ（ナデ消）	外：青灰色 内：赤茶褐色	普	
		48	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石・石英・角閃石	外：平行タタキ（ナデ消） 内：回転ナデ	暗青灰色	普	
		49	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石	外：ナデ 内：格子状タタキ（ナデ消）	青灰色	普	
		50	Ⅱ	類須恵器	胴部	長石	外：綾杉状タタキ（ナデ消） 内：格子状タタキ（ナデ消）	青灰色	普	
		51	Ⅱ	類須恵器	肩部	長石	外：綾杉状タタキ（ナデ消） 内：格子状タタキ（ナデ消）	青灰色	普	
		52	Ⅱ	石鍋	口縁	滑石	内・外ともに丁寧な研磨調整	青銀色		
		53	Ⅱ	布目圧痕土器	口縁	長石・石英・角閃石・雲母・小石	外：ナデ 内：布目圧痕	明茶褐色	粗	製塩土器？
		54	Ⅱ	不明	把手	長石・雲母	ナデ・押圧	赤褐色	普	
		55	Ⅱ	グスク土器？	胴部	長石・石英・雲母・小石	外：ナデ 内：粗いナデ	淡茶褐色	粗	石鍋摸倣土器？
		56	Ⅱ	グスク土器？	胴部	長石・石英・雲母・小石	外：ナデ 内：粗いナデ	淡茶褐色	粗	石鍋摸倣土器？
		57	Ⅱ	陶器	胴？	茶褐色胎土	外：ナデ 内：回転ナデ	外：淡茶褐色 内：赤茶褐色	硬	琉球焼？

第５表　提り遺跡出土石器計測表

挿図番号	トレンチ番号	遺物番号	層	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
7	1	18	Ⅱ	磨石	安山石	(5.3)	(3.5)	3.8	80	P 25
		19	Ⅱ	砥石	砂岩	(11.8)	4.4	(3.2)	1,830	P 25
		20	Ⅱ	磨石・敲石	安山石	16.5	12.0	6.5	400	P 33
10	2	25	Ⅱ	磨石	安山岩	(10.5)	(5.4)	(4.4)	324	P 22
		26	表	石皿	花崗岩	18.2	(8.5)	5.8	1,080	
15	6	31	Ⅱ	磨石・敲石 凹石	安山岩	9.8	8.0	3.4	320	P 1
24	11	41	Ⅱ	磨石	安山岩	(15.3)	(13.0)	6.4	1,730	P 3
26		58	Ⅱ	磨石・敲石	安山岩	(18.5)	(17.0)	10.2	1,560	
		59	Ⅱ	磨石	安山岩	(20.3)	(12.4)	(6.2)	740	
		60	Ⅱ	磨石・敲石	安山岩	(22.5)	(8.1)	15.3	1,300	

第27図　提り遺跡施工後の区画と遺跡の範囲

第3節　後　田　遺　跡（第3図・第28図）

塩道字後田に所在する。提り遺跡の南東約200m，微高地斜面に開かれた標高51mの畑地に位置し，提り遺跡と水口遺跡のほぼ中間にある。対象地は海岸段丘上の縁部にあたり，微高地を挟んで遺跡の北側約80mから段丘崖が落ち込みはじめる。

トレンチは対象区のほぼ中央に1本（2×3m）設定した。表土の厚さは約20cmで，以下のⅢ層（マージ）を20cm掘り下げたところで隆起珊瑚の基盤が検出された。Ⅱ層の黒褐色土は耕作による削平のためか残存せず，遺構・遺物は確認されなかった。調査対象面積400m²に対し，調査面積は6m²である。

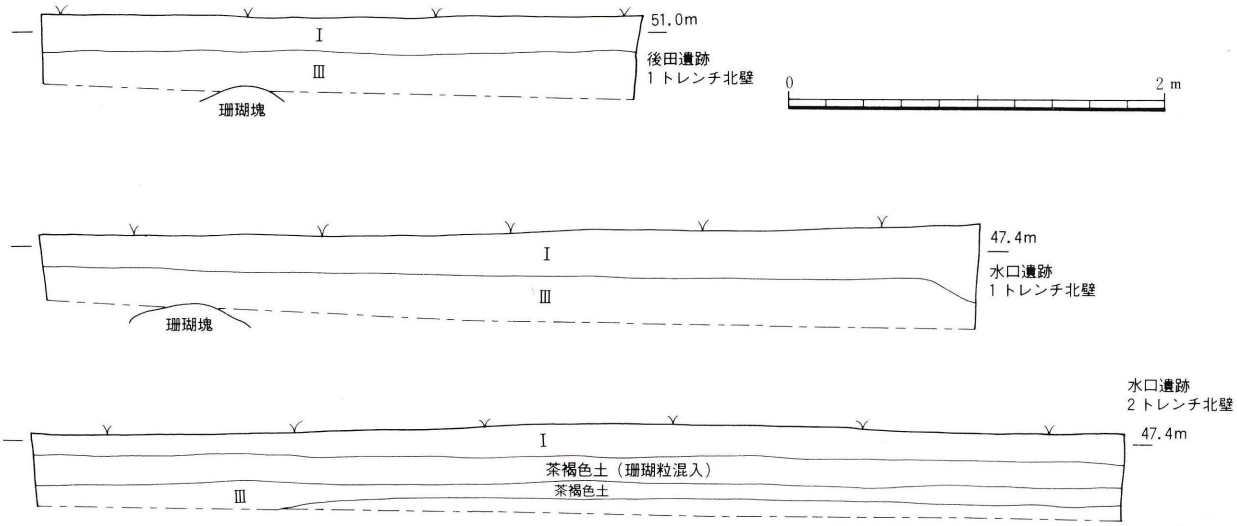
第4節　水　口　遺　跡（第3図・第28図）

塩道字水口に所在する。後田遺跡の東約200mに位置し，提り遺跡からの直線距離は約400mである。対象地は後田遺跡と同じく海岸段丘縁部微高地の内陸側裾部分に立地し，標高は約47mである。現在は畑地として利用されている。調査区域が東西に細長いため，東側及び西側にそれぞれ1本ずつ1，2トレンチ（2×5m，2×6m）を設定した。調査対象面積1,400m²に対し，調査面積は22m²である。

1トレンチは表土を20cm掘り下げたところでⅢ層の暗赤褐色土が検出され，遺物包含層であるⅡ層は耕作等によって削平されていることが判明した。Ⅲ層を約20cm掘り下げると部分的に隆起珊瑚塊が検出された。

2トレンチは表土（10～20cm）とⅢ層との間に，微細な珊瑚片を含む茶褐色土層と珊瑚片を含まない同色層とが存在し（20～30cm），以下は珊瑚の基盤が現れるまで約10cmの厚さでⅢ層が堆積する。この間層は，Ⅲ層を起源とする耕作土もしくは客土と考えられ，1トレンチ同様Ⅱ層は残存しない。

1，2トレンチともに遺構・遺物は確認されず，分布調査時に採集された遺物は客土中に混入したものか，あるいは天地返し等の耕作によって消失したと考えられるⅡ層中に含まれていた可能性がある。



第28図　後田遺跡・水口遺跡トレンチ土層断面図

第5節　竿　ク　遺　跡（第29図・第30図）

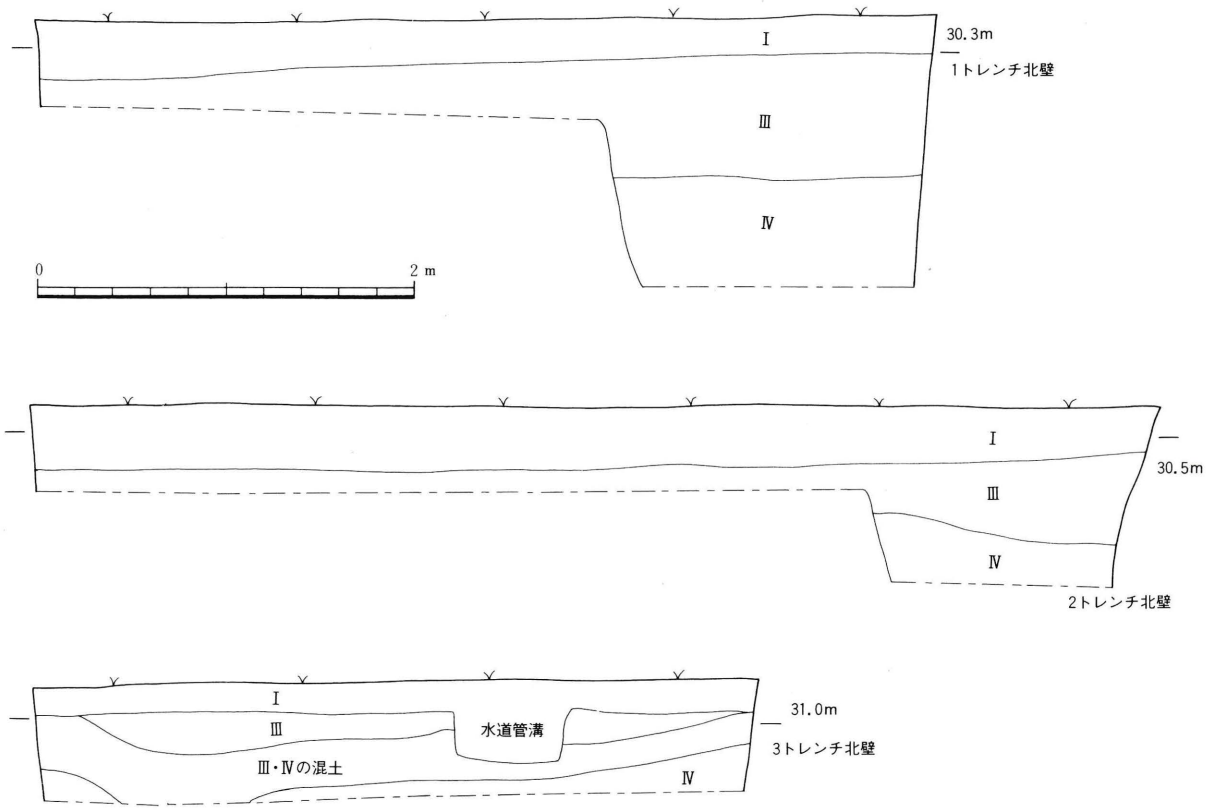
湾頭原字竿クに所在する。島の表玄関である喜界空港・湾港の南東約1,500ｍの台地上に位置している。対象地は町道に挟まれた標高30.3～30.5ｍの平坦な畑地で，調査対象面積約1,300㎡に対し３本のトレンチを設定して調査を行った。調査面積は30㎡である。

１トレンチは対象区北西の町道交差点に近い畑地に２×５ｍで設定した。表土（20～30㎝）以下はⅢ層の暗赤褐色強粘質土（約60㎝）が堆積し，以下にはⅣ層の乳白色砂質土がみられた。対象地の200ｍ北には大規模な砂採取場があることから，周辺の台地は砂丘上に形成されていると考えられる。

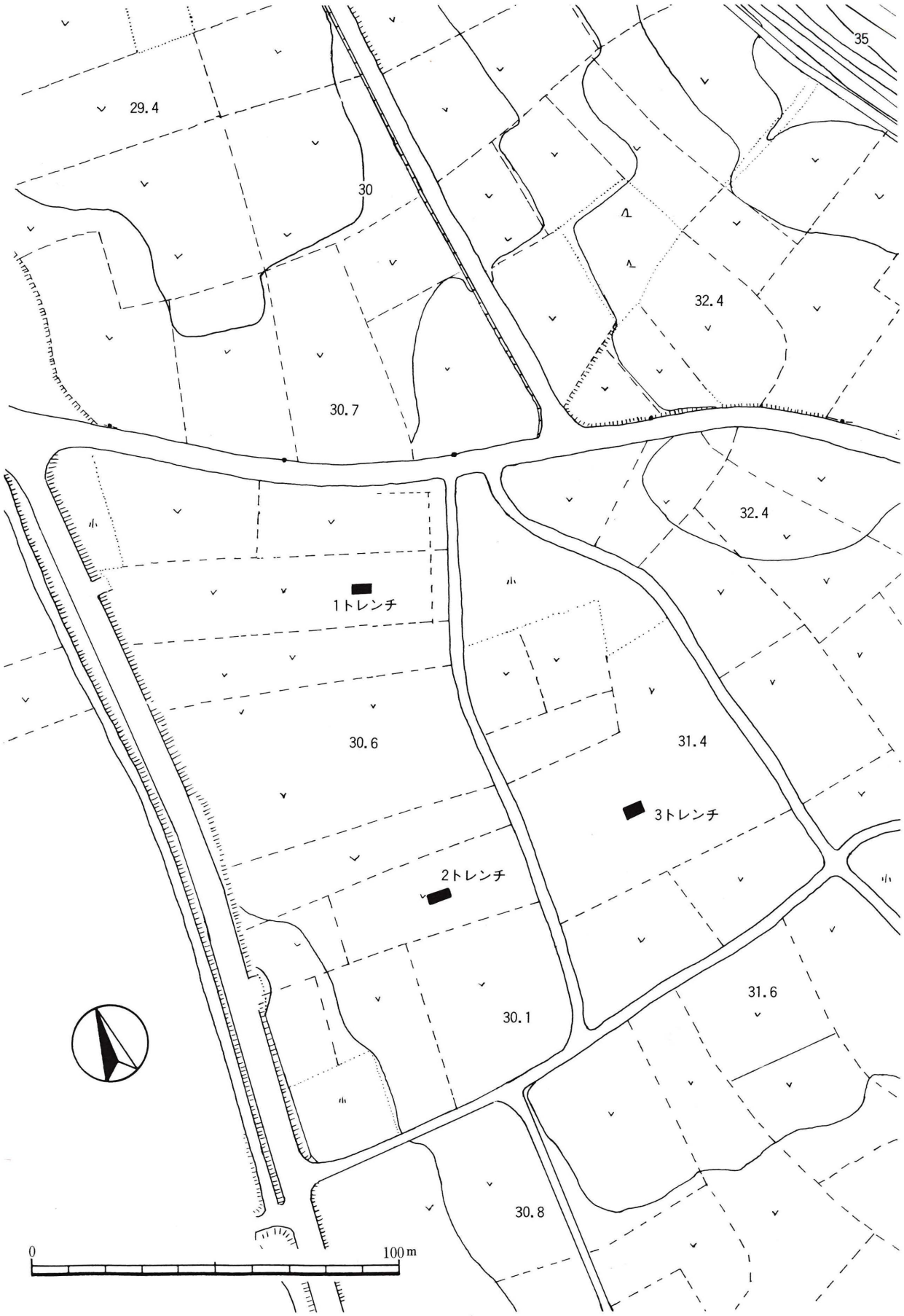
２トレンチは１トレンチの南東約80ｍに設定した（２×６ｍ）。層序は，厚さは異なるものの１トレンチとほぼ同様であった。

３トレンチは２トレンチの東約50ｍに設定した（２×４ｍ）。表土下のⅢ・Ⅳ層間に茶褐色の砂質層がみられ，各層の堆積状態も１・２トレンチと比較してやや乱れているが，これは水成作用によるものと思われる。

各トレンチとも包含層に相当する黒褐色粘質土（Ⅱ層）は検出されず，遺構・遺物も確認されなかった。付近の畑はサトウキビが栽培されており，天地返しによる土層の攪乱が行われている。分布調査時の採集遺物は耕作土中からのもので，対象区内に遺跡が存在していたとしても現在は失われた可能性がある。



第29図　竿ク遺跡トレンチ土層断面図



第30図　竿ク遺跡トレンチ配置図

第Ⅴ章　ま　と　め

今回調査の４遺跡のうち，後田遺跡，水口遺跡，竿ク遺跡については調査区内に遺物包含層は確認されなかった。耕作等による削平が行われたか，もしくは客土中の遺物が分布調査時に発見されたものと考えられる。堤り遺跡については，調査区内に設定したトレンチから遺構・遺物が検出された。以下に堤り遺跡の調査成果について，詳細を述べてみたい。

遺構について

設定した12のトレンチのうち９ヵ所において，ピット状遺構が確認された。分布状況としては遺跡の東側寄りのトレンチに比較的集中する傾向がみられ，遺跡の主体部が左側のやや低位（50ｍ前後）の地域にあることが想定される。これらの大半は，検出状況や断面の形状から掘立柱建物の柱穴と思われるが，確認調査という制限された面積での調査であるため，建物跡や広がり等遺構の性格については十分に把握できなかった。ただ２トレンチＰ１，Ｐ14のように検出面での径が１ｍ近く，深さも80cmを越えるような（柱木の想定径約20cm）柱穴の存在は，この地域にかなり大規模な建造物を含む建物群があったことを裏付ける。なお遺構の時期については，総括の項で触れたい。

遺物について

包含層の大部分が削平されていたため，出土遺物の大半は遺構内からのものである。総計約100点のうち，本書では60点を図化した。主体となるものは須恵器及び類須恵器であるが，他に特徴的な遺物としては玉縁口縁白磁碗，滑石製石鍋，獣骨を伴う甕などが出土した。

須恵器については，１トレンチ（Ｐ１）及び６トレンチ（Ｐ２）から比較的大きな破片が検出された。１トレンチのＰ１には特に集中してみられ，緻密な胎土，硬質な焼成状態，外面の浅く交差する条痕タタキ，内面の同心円状タタキ等の特徴をもつ。６トレンチのものは厚手で，焼成状態はやや軟質，外面に深い斜位の条痕タタキ，内面にはヘラ状工具によるナデ痕が観察される。また11トレンチからは胎土に多量の長石を含むものが出土している。本遺跡出土の須恵器は以上の３タイプに概略分類されるが，これらは少なくとも別々の窯で焼かれたものであろう。県下ではこれまでに川内市鶴峯窯跡群，金峰町荒平窯跡群など５ヵ所の須恵器古窯跡が知られており，いずれも10世紀以前の古代に位置づけられている。[1] 本遺跡出土の須恵器は，類須恵器や玉縁口縁白磁碗との共伴関係から12世紀前後の時期が想定される。同時期の窯としては，近圏では熊本県球磨郡下り山窯跡が挙げられる。この窯跡は伊仙町カムィヤキ古窯跡との関連も指摘されており，[2] 本遺跡の出土遺物も含め，今後相互関係を検討してゆく必要がある。

次に類須恵器について考察してみたい。南西諸島に広く分布するこの陶質土器に関しては，以前から数名の研究者によって調査研究がなされてきたが，1985年の伊仙町カムィヤキ古窯跡の調査によって，その様相解明に大きな前進を遂げた。喜界町内でもこれまでに数多くの出土例が報告されており，平成４年度調査のオン畑遺跡では完形の壺が出土している。[3] また大正初期頃，志戸桶字七城の畑から５個の完形壺が滑石製石鍋とともに発見されたという記録がある。[4] 本遺跡出土の類須恵器は小片が多いものの，殆どが壺の破片と思われる。器面調整は外面に綾杉状もしくは平行タタ

キ，内面に格子状タタキもしくはタタキのナデ消しが中心で，以前から一般的類須恵器とされていた篦描波状沈線文をもつタイプはみられない。これらはカムィヤキ古窯跡における壺C類に比定できるが，カムィヤキ古窯の類須恵器がすべての類須恵器を包括するものではないという指摘もあり[2]，現段階では「同様のタイプ」という範疇に止めておきたい。

11トレンチのP２より出土した甕（巻頭図版参照）は，沖縄本島を中心としたかつての琉球文化圏に広く流通した所謂グスク土器である。グスク土器については，沖縄県の研究者により分析・研究が進んでいる。この土器は，貝塚時代からグスク時代への転換期（10～12世紀頃）に滑石製石鍋や須恵器壺の影響を受けて成立し，14世紀後半～15世紀前半に明との進貢貿易開始に伴う陶磁器流入によって消滅していったとされている[5]。この壺は，頸部から口縁部にかけてわずかに外反しつつ立ち上がり，胴中央部付近に最大径をもつ平底土器で，沖縄県那覇市ヒヤジョー毛遺跡（鉢形土器Ⅲ類）[6]，同玉城村糸数城跡（壺形土器C類）等に類例がみられる[7]。胎土に滑石を含む点が特徴的であるが，ヒヤジョー毛遺跡出土の滑石製石鍋模倣土器について同様の報告がある[6]。また共伴してウシの肋骨（第Ⅵ章参照）が出土していることから，この土器は風習的もしくは祭祀的な蔵骨器である可能性があるが，正確な判断を下すには類例の検討を慎重に行う必要がある。いずれにしてもグスク土器の中では特殊な部類に属するものと言えよう。

滑石製石鍋はわずか２点の出土で，いずれも小片であるが，明瞭に内湾する口縁部に特徴がみられる。これは森田勉氏の編年に従えばB類－１，木戸雅寿氏の案ではⅢａ類に比定され，ともに12世紀初頭～13世紀前半に位置づけられる[8]。前述の志戸桶字七城より類須恵器とともに出土した石鍋も同タイプに属する。その他に製塩との関係が指摘される布目圧痕土器や[9]，滑石製石鍋模倣土器の一部と思われる破片も出土しているが，いずれも小片のため今回は言及を避けたい。

総　　括

今回の堤り遺跡の調査は，狭い面積と少ない遺物量にもかかわらず，いくつかの興味深い成果をもたらした。これまでに南西諸島全般において指摘されていた類須恵器，滑石製石鍋，玉縁口縁白磁の共伴関係が本遺跡においても確認された。類例に乏しい蔵骨器としてのグスク土器の存在や，本土産須恵器と上記の遺物との共伴関係なども注目すべき事例である。またカムィヤキ古窯と下り山窯は，窯の形態や遺物の器種・器形，玉縁口縁白磁の共伴等多くの共通点が指摘されていたが，今回の調査結果はその可能性を裏付けるとともに，南島と九州本土との交流様相の一端を窺わせるものとなった。

遺構の時期については遺構内遺物から判断するのみであるが，ピット状遺構という性格上流入の可能性も否定できない。須恵器を下り山窯の関連で古代末，鍋蓮弁文青磁を13世紀とすれば，遺物包含層としてのⅡ層の年代幅は少なくとも11～13世紀となり，カムィヤキ古窯群の熱残留磁気測定結果とも一致する。また遺構内遺物からみれば，口縁が内湾する滑石製石鍋と玉縁口縁白磁の共伴から，ほぼ12世紀前後と位置づけられるのではないか。

喜界島は南島の中でも滑石製石鍋が集中する点など以前から注目されていたが，今回のまとまった本土産須恵器の出土や特徴的なグスク土器の存在が，この島の南島における特異性をさらに印象づける結果となった。行政区分の「南島」ではなく，沖縄も含めた地理学上の「琉球弧」という視

点からみても，その西端にあたる本島が西の玄関口もしくは本土との「ジャンクション（交流点）」としての役割を担っていた可能性は十分に考えられる。

〔注〕

(1) 船山　良一・松元　敏三・池田　榮史　『須恵器集成図録』　第５巻西日本編　雄山閣　1996

(2) 伊仙町教育委員会　「カムィヤキ古窯群Ⅰ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』　1985

伊仙町教育委員会　「カムィヤキ古窯群Ⅱ」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』　1985

(3) 喜界島教育委員会　「オン畑遺跡・巻畑Ｂ遺跡・巻畑Ｃ遺跡・池ノ底散布地」『喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』　1993

(4) 喜界島教育委員会　「喜界島みてある記」　1982

(5) 安　里　　進　「各地の土器様相　沖縄」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

(6) 那覇市教育委員会　「ヒヤジョー毛遺跡」『那覇市文化財調査報告書第26集』　1994

(7) 玉城村教育委員会　「糸数城跡」『玉城村文化財調査報告書第１集』　1991

(8) 木　戸　雅　寿　「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995

(9) 松山町教育委員会　「井手間遺跡・山ノ田遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』　1989

第Ⅵ章　提り遺跡出土のウシの遺体

鹿児島大学農学部　西中川　駿

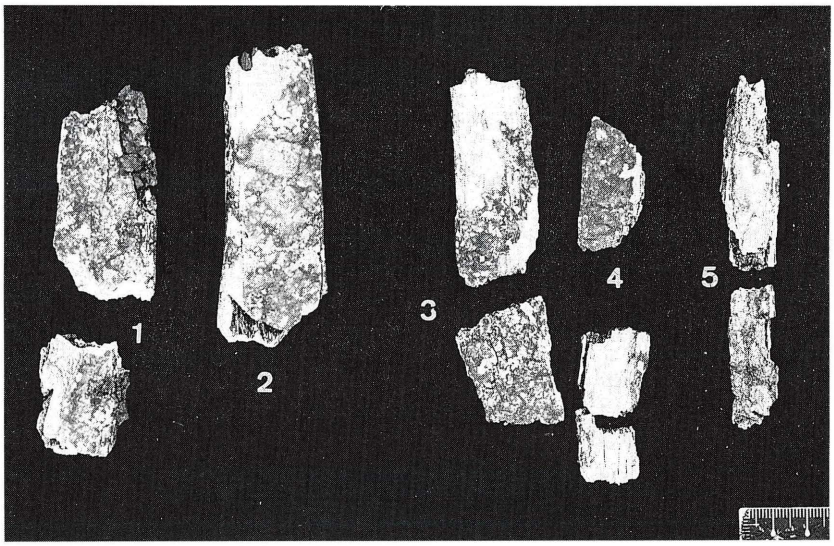
提り遺跡は，大島郡喜界長湾頭原及び塩道地区の県営畑地帯総合土地改良事業に先駆けて調査された四遺跡のうちの一つである。喜界町が主体となり，県立埋蔵文化財センターの指導の下に発掘調査が行われた結果，11トレンチのＰ２内より動物遺体が検出された。

動物遺体はウシの肋骨で，細かく砕かれた骨片等数十点が検出されている。肋骨は左右のもので前位から後位にかけてみられ，いずれも成牛の同一個体のものと推定される（図版）。

中世の時期のウシの出土は全国的に数多くみられ，筆者らの調査では，九州でも23からの出土例がある。奄美諸島からは長浜兼久遺跡や宇宿貝塚からの報告例はあるが，時代は確定されていない。

提り遺跡出土のウシの肋骨は，現代和牛のものより小さく，我が国の在来牛である口之島野生牛と同じ大きさである。このウシが口之島野生牛と同じ体高を有したとすれば，110～115cmであったことが想像される。

〔図版〕



ウシの肋骨（１～５）
１～３：前位の肋骨
４～５：中，後位の肋骨

〔参考文献〕

笠利町教育委員会　「宇宿貝塚」『笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980
鹿児島県教育委員会　「長浜兼久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)』 1985
西中川　駿　他　「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成２年度文部省科研費報告書』 1991

図　　版

提り遺跡遠景

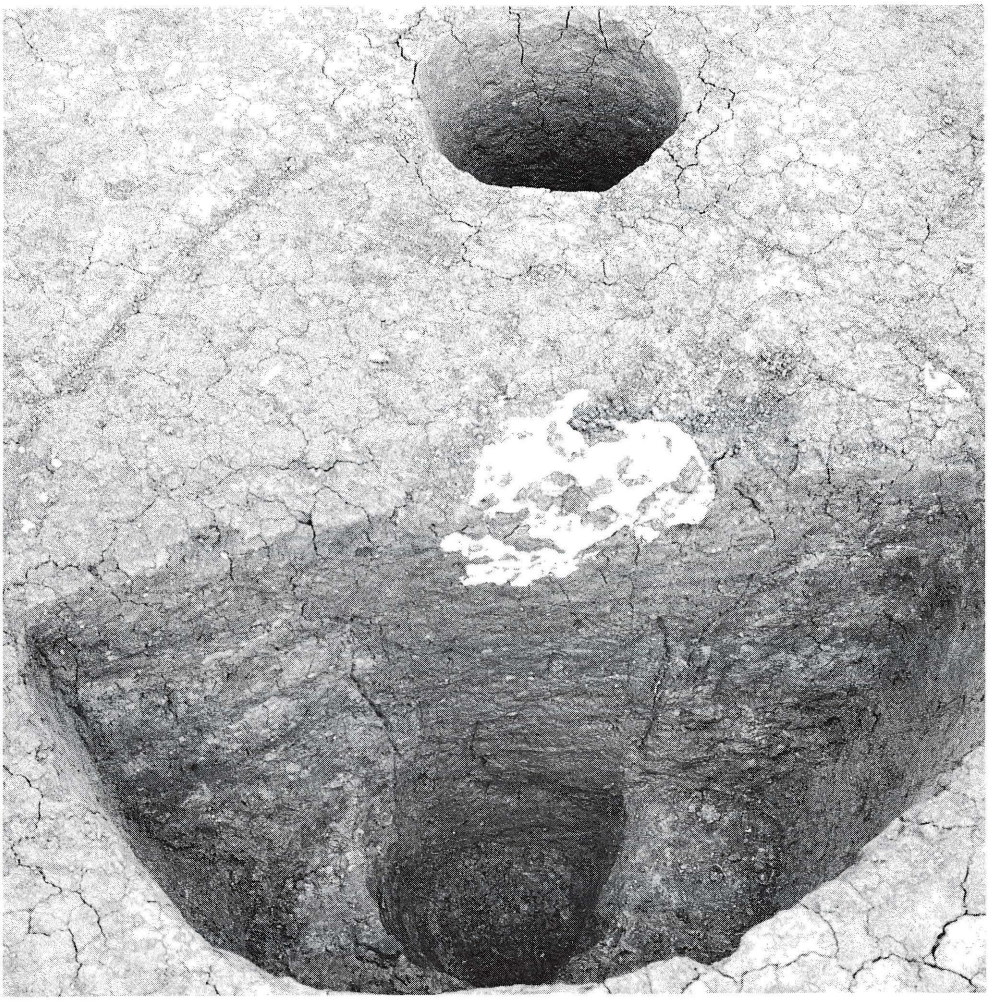
提り遺跡１トレンチ

提り遺跡１トレンチ

Ｐ25

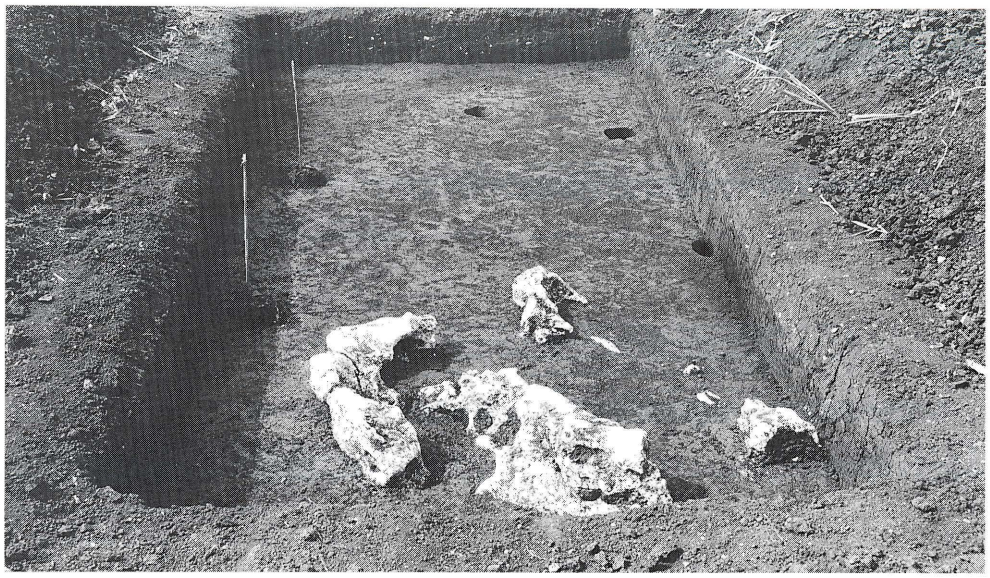
図版 2

提り遺跡 2トレンチ



提り遺跡 2トレンチ

P 14断面

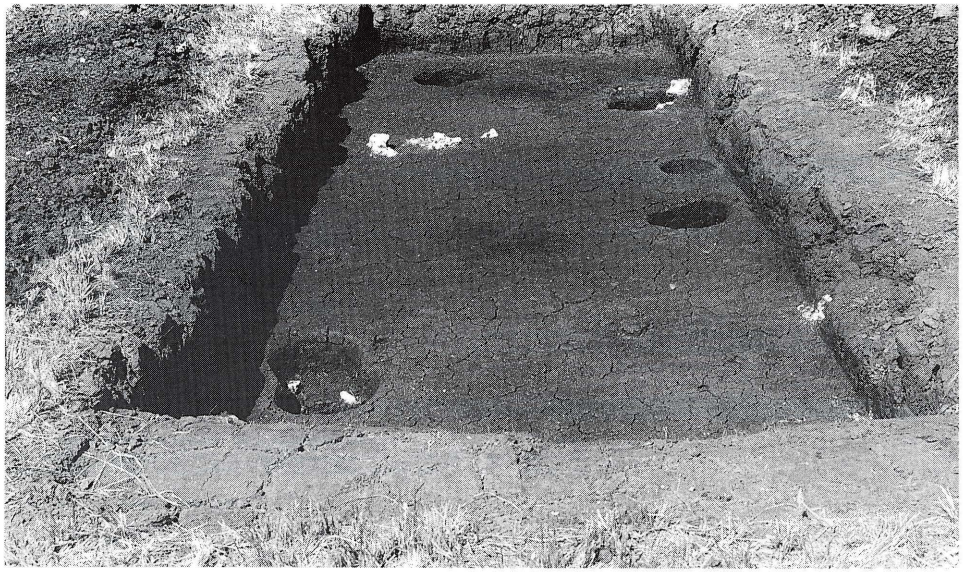


提り遺跡 3トレンチ

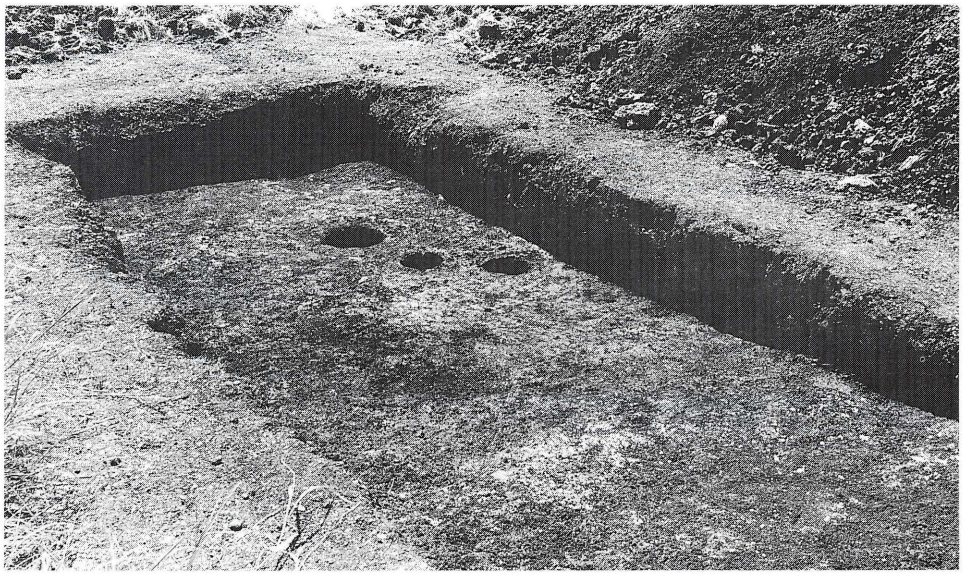
提り遺跡 4トレンチ

提り遺跡 5トレンチ

図版 4



提り遺跡 6トレンチ



提り遺跡 8トレンチ

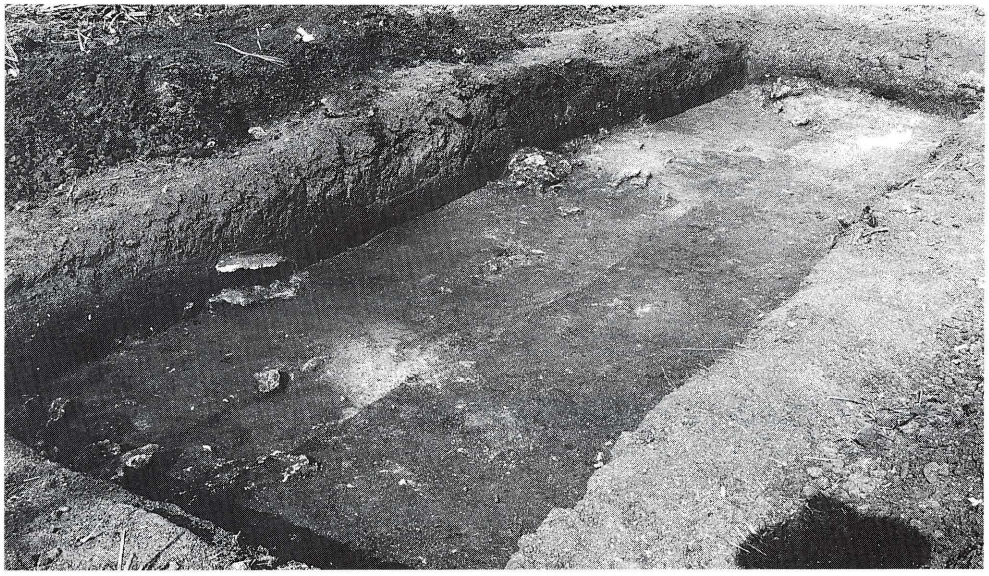
提り遺跡10トレンチ

提り遺跡11トレンチ

同　　上
柱穴近影

図版 6

後田遺跡近景



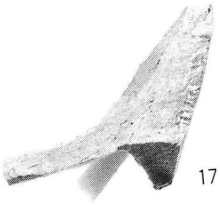
水口遺跡 2トレンチ

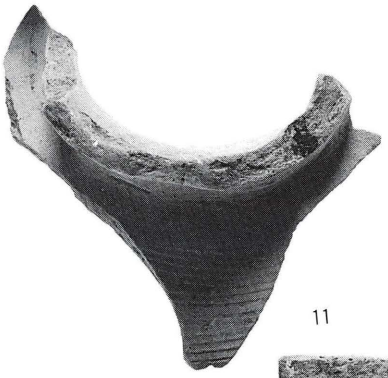
竿ク遺跡 1トレンチ

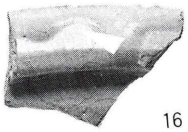
14

10

9

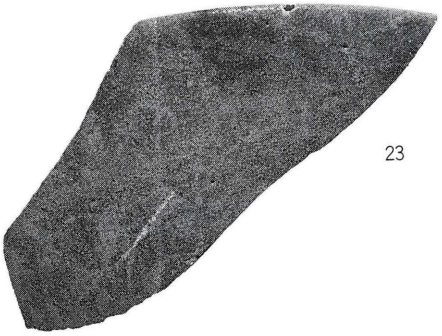

17


11

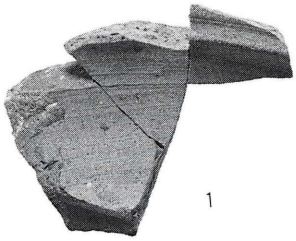

16

12

13

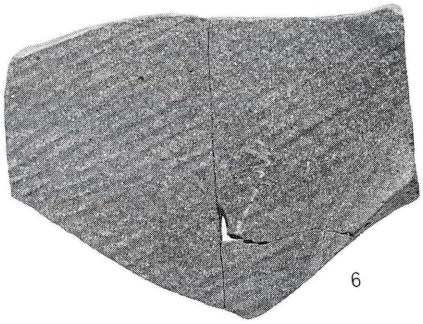

23

4


1

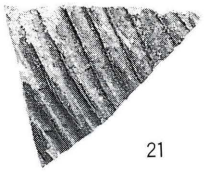
2

7

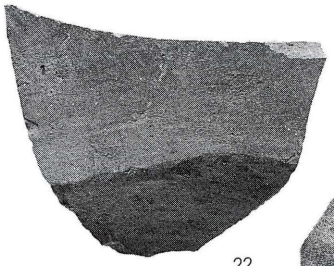

6

図版 8

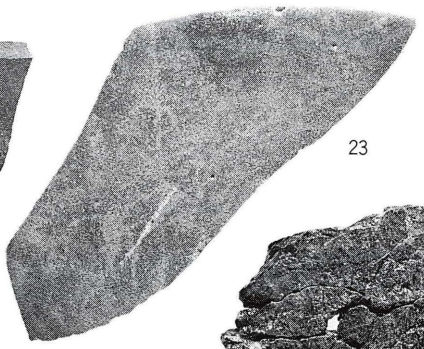
8



21

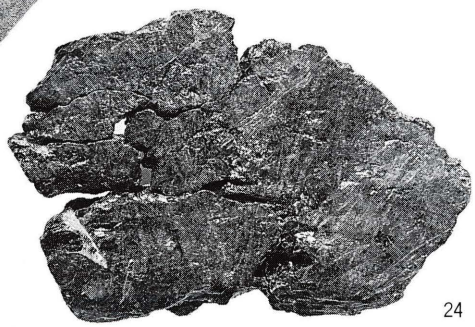


22



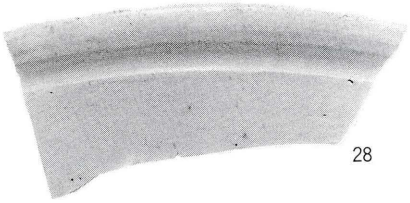
23

27

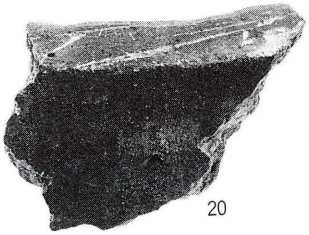


24

30



28



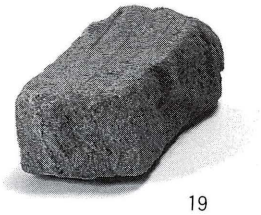
20

32

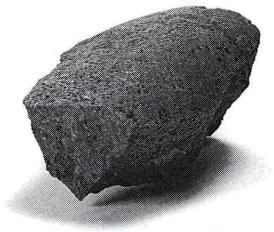
34
33
36
37
39
38
40
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
57
54
56

図版10

18



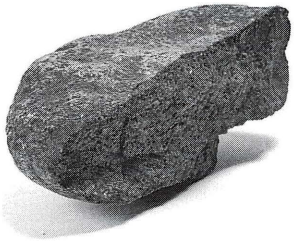
19



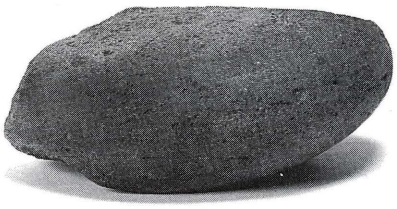
25

31

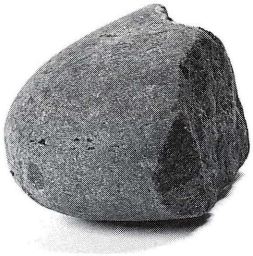
20



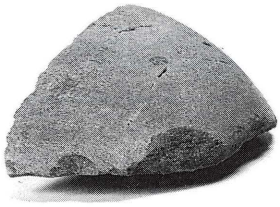
26



41



58



59

60

喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
県営畑地帯総合土地改良事業(塩道・湾頭原地区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

提り遺跡・後田遺跡
水口遺跡・竿ク遺跡

発　行　1996年3月
編　集　喜界町教育委員会
鹿児島県大島郡喜界町湾61番地
印　刷　株式会社　トライ社
鹿児島市南林寺町12－6
☎(099)226－0815